

「県政タウンミーティング」会議録

テーマ 「信濃美術館の今後のあり方に寄せる期待や思い」

日時 平成28年10月14日（金） 午後6時から9時まで

場所 長野県庁 講堂（長野市）

目次

1 開会	P 2
2 知事あいさつ	P 2
3 信濃美術館の今後のあり方及び整備に関する基本方針の説明	P 5
4 意見交換	P 12
5 知事総括コメント	P 50
6 閉会	P 53

【参加者】

県民 87人

長野県信濃美術館整備検討委員会 委員長 竹内順一氏（東京藝術大学 名誉教授）

進行役 石川利江氏（ISHIKAWA地域文化企画室代表）

オブザーバー 轟 邦明氏（長野市都市整備部長）

オブザーバー 清水雄介氏（善光寺宮繕副部長）

長野県知事 阿部守一

長野県県民文化部長 青木 弘

1 開 会

【広報県民課長 藤森茂晴】

皆様、お待たせいたしました。本日は平日の夜間にもかかわらず、大勢の皆様にお集まりいただきまして、まことにありがとうございます。

ただいまから「県政タウンミーティング」を開催いたします。意見交換までの進行を務めます、私、長野県広報県民課長の藤森茂晴と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

さて、本日の県政タウンミーティングは、県立信濃美術館の今後のあり方について、県民の皆様と意見交換を行ってまいります。限られた時間ではございますが、率直なご意見やご提案をいただきながら理解を深め、ともに考える機会にしたいと思っております。なお、本日の意見交換の内容ですが、お名前などの個人情報を除き、後日、県のホームページで公開させていただきますので、ご承知おきください。また、本日は取材の関係で報道機関の方もおられます。大変恐縮ですが、参加者の皆様の中で、取材の映像等について支障のある方いらっしゃいましたら、挙手をお願いいたします。よろしいでしょうか。

それでは、これからおおむね8時までの時間の予定で意見交換に入ってまいります。

まず初めに、長野県知事、阿部守一からごあいさつ申し上げます。

2 知事あいさつ

【長野県知事 阿部守一】

皆さん、こんばんは。今日は平日の夕方の何かとご多用なときに、大勢の皆様方にこうしてご参加いただきまして、大変ありがとうございます。

今日はタウンミーティングではありますけれども、一般的に開いているタウンミーティングとは違って、1点のみ、信濃美術館の今後をどうするかということに絞ってタウンミーティングをさせていただきました。

私は長野県政、皆さんの付託を受けて担っている中で、いろいろな行政分野があります。医療や福祉、教育、産業振興、観光、いろいろな分野がありますけれども、これからの未来に向けて、長野県としてぜひ重点を置いていきたいというふうに思っていることのひとつが、文化芸術の振興であります。

何というか、これまで行政の中ではあまり文化芸術の振興、特に長野県においてはそんなに力を入れてきていなかったんじゃないかなというのが私の率直な感覚です。しかしながら、これからの社会のあり方を考えたときに、もちろん経済的な豊かさを維持していくということはこれからも必要だと思いますけれども、かつて右肩上がり人口が

増えて右肩上がりです。経済が成長して、そういう中で社会資本もどんどん整備して物の豊かさを追求していくという、ある意味で社会の発展の形があったわけですが、一定程度、物の豊かさは達成して、他方で格差の問題とか子どもの貧困とか、向かい合わなければいけない問題がありますけれども、しかしながら、例えば私、55歳ですけれども、私の子どもころに比べてもやっぱり物が豊かですよね。

大前研一さんは「低欲望社会」というふうに言っていますけれども、そういう意味では、これ買いたいとかこれ欲しいとか、ではそれを実現するためにみんなで頑張りましょうという時代とは少し変わってきているのではないかなというふうに思います。これからはやっぱり、私は心の豊かさ、物の豊かさから心の豊かさを実感できる社会にシフトをしていかなければいけないだろうというふうに思います。

もっといえば、この文化芸術の分野は、これは行政が一から十までやる分野ではないです。例えば道路をつくったり、学校をつくったりみたいなものは、もうこれ行政が全部100%やるべきなんですけれども、この文化や芸術というのは、別に行政がリードする話でもありませんし、全て私どもが担う話でもないわけでありまして、県民の皆さんの多様な活動とかそれぞれの思い、そうしたものがあって充実した文化芸術になってくるものだと思います。しかしながら、行政においても取り組むべきことは幾つかあるんじゃないかなというふうに思っています。

今、文化振興事業団の理事長に近藤誠一さん、前の文化庁長官で、もとは外交官をされていた方ですけれども。近藤誠一さんには私からやはり長野県、本当に文化芸術で心の豊かさを実感できる社会になるように、ぜひ引っ張ってってもらえませんかということをお願いをさせていただいていますし、また串田和美さんを初め何人かの方、芸術監督団ということで、これは文化振興事業団のほうでお願いをさせていただいています。文化芸術の分野は私だったり、あるいは行政がこうだこうだというふうに決めるのではなくて、やっぱりいろいろな皆さんの意見を反映しながら取り組んでいく必要があるということで、芸術監督団の皆さんに、大きな方向性は私とすり合わせをしてもらわなければいけないとは思っていますけれども、しかしながら、行政がこれやれあれやれということではなくて、ああした方々が、県民の皆さんとも十分思いを共有してもらった上でいろいろな取り組みを進めていてもらいたいというふうに考えて、芸術監督団を置いています。また、財政的な面でも文化振興基金というのを設置をして、そこからいろいろな文化芸術活動に対して、これまでの県の予算に比べると、全体の予算からするとまだまだ微々たるものではありますが、文化芸術に財政的にもシフトさせようということに取り組んできています。

そういう中で、今日のテーマは信濃美術館であります。これは皆様方もご承知のとおり、昭和41年、信越放送SBCと、それから信濃毎日新聞のご尽力で創設され、そして50年が経過しようとしています。信濃美術館、県内唯一の県立の美術館ということで、県民の皆様方に上質の美術鑑賞の機会を提供するとともに、地域に根ざした芸術活動を

実践し、県民文化の向上に一定の役割は果たしてきたのではないかというふうに思っています。しかしながら50年を経過しようとする中で施設の老朽化は大変著しいものがありますし、私も文化芸術のそんな専門家ではありませんけれども、美術館の裏表いろいろ見せていただくと、さすがにちょっとこれから未来に向けて、このままではいけないんじゃないかというふうに感じています。

美術館の場合は単に箱があればいいということだけではなくて、しっかり鑑賞いただくスペースも必要ですし、それと同時に重要な美術品をしっかり保管するという機能も必要なわけがありますので、そういう意味では、ただ単にそこに建物が建っていればそれでいいというものではないだろうというふうに思っています。

そういう意味で、この信濃美術館のあり方整備検討委員会を設置をして、先般、私の隣に竹内委員長お越しいただいていますけれども、信濃美術館の今後のあり方、そして整備に関する基本方針というものを整備検討委員会において取りまとめていただいたところでございます。ぜひ、今日はこのおとりまとめたいただいた基本方針をもとにして、ぜひ皆さんと対話、キャッチボールをしたいというふうに思っています。

今回は整備検討委員会の皆さんに方針をつくっていただいたわけでありまして、今後、県がこの方針を踏まえて具体的な基本構想をつくっていくという段階になります。そういう過程において、ぜひこの基本方針についてどういう受けとめなのか、あるいはどういう形で今の信濃美術館をごらんになっているか、あるいは、これから将来に向けて長野県の文化芸術行政、とりわけこの美術館のあり方、信濃美術館のあり方、どういうふうに皆さんがお考えになっているのか、こうした点について率直なご意見をいただければ、大変ありがたいというふうに思っています。

ちょっと私があまり長いあいさつをすると時間がなくなってしまうので、冒頭のごあいさつはこの程度にさせていただきます。あとは、今日は石川さんがファシリテートをやっていただくんですね、バトンタッチをさせていただきます、ぜひ有意義な場にしていきたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

【広報県民課長 藤森茂晴】

それでは、本日、中央に座っております主催者側の出席者を紹介させていただきます。

皆様から向かって左側から、本日の進行役を務めていただきます石川利江様です。石川様の略歴につきましては後ほど紹介させていただきます。

それから、信濃美術館整備検討委員会の委員長で、東京藝術大学の名誉教授でありまして、竹内順一様でございます。

そして知事の隣ですけれども、長野県県民文化部長の青木でございます。

そのほか、オブザーバーといたしまして、長野市から轟都市整備部長さんです。

それから善光寺から、清水宮繕副部長にお越しいただいております。

それでは、本日の進行役をご紹介します。石川様ですけれども、長野市出身で、

現在、ISHIKAWA地域文化企画室の代表でいらっしゃいます。

お仕事の内容は主に3つございます。1つ目として、行政や企業のアート分野の企画運営、アートワークの企画デザイン、それから2つ目として、地域文化の発信・振興のサポート、まちづくりの文化視点での助言・企画、それから3つ目として、展覧会等の企画運営ということで、市内にございますギャラリー・ガレリア表参道の運営などを行っています。

なお、エコールド松代2004の専門プロデューサーをされたほか、テレビ信州放送番組審議会委員委員長や、長野県信濃美術館協議会委員、長野市総合計画審議会委員、長野県都市計画審議会委員などの公職を歴任されております。文化関係のシンポジウムや講演会等の進行役の経験が豊富な方でいらっしゃいます。

それでは、石川様、この後の進行をよろしくお願いいたします。

3 信濃美術館の今後のあり方及び整備に関する基本方針の説明

【進行役 石川利江氏】

今日、進行役を務めさせていただきます石川でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

本日のタウンミーティング、予想以上のたくさんの方にお集まりいただきました。ぜひ皆さん、お一人お一人、胸に秘めた美術館への思いとか、また具体的なご提案もお持ちの方も多いと思いますので、ぜひ最後までご意見を出し尽くしていただきたいと思えます。

私も長い間、県内のいろいろなアーティストや工芸作家とさまざまな展覧会企画などをしてまいりました。これからの時代の中で、求められる美術館としての機能を持ち、県の美術界の中心になる美術館がほしいという思いを、長い間多くの方々が持って来たと思えます。

今日こういう形で、具体的に新美術館に関して皆さんと検討できる、こういう場を開くまで、そこまで来たということ、まず個人的にもとてもうれしく思っておりますし、今日はできるだけ皆さんに多くのご意見をいただきたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

ぜひ今日は、皆さんあまりシーンとした雰囲気ではなくて、できるだけ、アートに関するテーマですので、柔らかな気持ちでいろいろな意見、いろいろな立場の方のご意見をお願いいたします。

それではまず検討委員会で、これまでの検討経過や結果などについて、竹内委員長さんからお話をいただきたいと思えます。どうぞよろしくお願いいたします。

【検討委員会委員長 竹内順一氏】

それでは早速、説明をさせていただきます。皆様にお配りしている次第の次にある、このとじられた色のついたものがありますが、これに基づいてお話を申し上げたいと思います。

去年の4月から約1年半にわたってこの会議を開いてまいりまして、メンバーはこの裏側のページの一番最後のところに書いてありますが、メインの検討委員会は13名、そのうち4名が重複しますが、作業部会をつくりまして、あわせてこの20名が会議を開いてまいりまして、6回の会議と3回の作業部会であわせてつくられたのがこの基本方針であります。

私ども一番気をつけていたのは、世界から見た長野県は一体どうだろうか、あるいは日本の中で長野県はどうなっているかというところで、文化面のいわば立ち位置と申しますか、そのところをやっぱり意識する必要があるのではないかとということをもまず最初に考えました。

特に、あとでまたお話し申し上げますが、大規模な国際展、国際巡回展が東京とか関西、あるいは名古屋地域には行くけれども、こちらにはなかなか来ないというようなことは非常に文化展、美術展の一種のへき地扱いをされているんじゃないかと。それには必要な会場もないとか、そういうことがあったわけですけども、やっぱりそういうところで初めから大きな世界、あるいは日本全体から見るところが大事ではないかということから始まりました。この間、幾つか美術館関係者とも話したり、それから意見交換会、あるいはパブリックコメントということで、非常にたくさんのご意見をいただいております。今日は皆様からいただいたものも蓄積させていただいて、これから役に立てようというわけであります。

今、知事から話がありましたように、信濃美術館は昭和41年、今年で満50年なんです。当時は一番新しい県立美術館だったんですが、最初3年ほどは民間、今、話がありましたように民間立で始まって、途中から県立になったんですが、一番新しい県立美術館だったのが今日では50年、半世紀たちましたので一番古い県立美術館になってしまいました。建物の老朽化とかいろいろありますけれども、一番大事な点は今の時代の要求に合わない。いろいろな空間的な制約、あるいは設備的な制約がありまして、特に最近では国宝とか重要文化財を並べる場合、文化庁のほうから非常に厳しい条件がつけられますが、善光寺御開帳にあわせて日本の仏像を並べようとしても、あるいは仏画を並べようとしてもなかなか大変で、ご苦労が多いわけですけども。そんなハード面のハンディを背負いながら、橋本館長を初めとしてスタッフの皆さんは随分、私が見ていると人数が少ないんじゃないかなと思うんですけども、本当に全力を尽くしてやっていただいて、その点は感謝しております。この50年の中で、今日ある中で非常に全国の中では重要な地位を占めていると思います。

特に平成2年から東山魁夷館ができて、このときには信濃美術館50年の歴史の中

で一番人が入って、1年間に40万人が来たときだったんですけれども、そういう非常にいいものを見せるようにすれば必ず人が来るということを証明したわけです。いずれにしても収蔵庫、それからバリアフリーとか、いろいろな点で老朽化していますので、この際ということで、この検討を始めたわけですが。

元へ戻りますと、あくまでも老朽化した建物を新しくするというような、そういう視点ではなくて、もう一度、広い立場で見ようというふうに考えました。

具体的に4つの項目を今の表紙のところでも申し上げたいと思いますが、一番最初がコンセプト1ですが、ランドスケープ・ミュージアムという、少し英語で恐縮ですが、という考え方を出しました。

このランドスケープというのは風景画ということですが、美術館が風景画の中にあるように、あるいは風景と一体化するというは、当然、善光寺、あるいは東山魁夷館と、あるいは信州の、もっと広く信州の自然とか山並みと一体化するようなところで美術を見る、あるいは芸術を見るという、そういうことが大事ではないかということで、一番最初にこれを取り上げました。

なお、これ将来、世界に打って出るとき、ランドスケープ・ミュージアムといったときに通じるかどうかということがありますけれども、私が調べた範囲では十分で、世界の中でもロシアにあるんですけれども、ランドスケープ・ミュージアムという小さな美術館があるんですね。これは地元の風景を地元の画家が売るようなものですから規模は全く違うんですけれども、一応、名前としてはほかにもあるということでもあります。

そういう、ここにも善光寺さんの関係者がいらっやっていただいていますけれども、お隣にある古刹といいますか、お寺との関係をどうするかということは非常に重要なところで、調和を保つようにというふうに思っておりまして、あとの中に少しイメージの絵を描いておきました。これが第1番目。

第2番目は、美術館で美術教育をしようじゃないかということに柱に据えております。今の美術館教育とか美術教育というのはもう非常に古い言葉になりました。あるいは美術を通しての教育というのは、もう50年以上前から提唱された古い概念ですので、もう少しその言葉の点でも新しい美術による教育ということで、ここに美術による学びの場をつくって、それを支援していくようなことを考えようというのが2番目であります。

これは当然、小中学生が中心になりますが、さらに就学前の幼児、それからお年寄りなども対象にし、それからここには若手の信州出身のゆかりのある作家も入っていただいて、それもあわせてワークショップなどをしようという意味で作りしました。細かいところはまた後に書いてありますが、美術による学びの場というのをつくってこうと。

3番目が、これは最初のランドスケープにも関係していきますが、信州の多様な地域文化をいかにわかりやすく発信するかということです。

特に信州は、いつもこういうことを考えると、東西問題、あるいは南北問題がありまして、非常に縦に長い県でありますので、長野だけにこういうのが集まるのはどうだろ

うかというご意見が必ずあります。

そういうことで、それをいつも考えまして、たまたま建物はこの長野市にできるわけですけれども、やっぱりネットワークを中心として、連携をとっていこうというのがこの趣旨であります。そして連携をとった上で、この信州ゆかりのいろいろな芸術文化を紹介しようというわけであります。

ここで少しちょっと申し上げたいのは、今、県立信濃美術館があるわけですけれども、これを経営的に考えると、自分の館のことだけ心配しているのが信濃美術館だったんですね。これはほかの美術館でも多くはそうで、例えば今回の委員の中に3人ほど入っているんですけれども、国立博物館、国立美術館の振興はどうか、あるいは評価というようなことについて私もずっと関係しておりまして、それから財団の近藤理事長も関係しているんですが、どういうふうに国の博物館があるべきかという議論の中で、今では信じられないんですけれども、例えば上野にあります東京国立博物館も、東博と呼んでいます。東博だけのことしか考えない美術館経営だったんですね。私もその評価委員もそれはおかしいんじゃないかと、ナショナルなんだから、国の中心のナショナルセンターとしての役割を果たして、そしてほかの県立の美術館、あるいは私立の美術館をサポートする組織にすべきだということを行ったんですけれども、初めはけんもほろろで、予算の中にほかの美術館の面倒みろという項目がないじゃないかと、なので、自分の館で精いっぱいですということで、3年間ぐらいそういう議論は、やりとりがなかなか実りがなかったんですけれども、あるとき国の行政改革の中で、国立博物館は多過ぎると、国立美術館もほかにあるんじゃないかと、その美術館と博物館の違いもよくわからないし、実際に東博でやっていることは美術展ではないかということで、合体論が出たんですね。そこで初めて合体、要するに一本に絞るというようなことは不可能だと。それにはなぜかという中に、ナショナルセンター的な役割を果たすということで予算もつけようじゃないかということの議論になりまして、事実予算もついたので、そのことで国の中心になったというわけですね。

それと同じことで、この長野県の中にもたくさん美術館がありまして、美術館、博物館の数は日本一だと私は思うんですけれども、人口比、面積比からいうと非常に多い美術館があって、それぞれ学芸員がいて、館長がいて、活動していますが、そういうのを全体的にサポートするような、施設は長野にあるんですけれども、機能的には全県下をネットワークを通じて応援をしようというような組織をつくろうというのがこの考え方です。

特に、美術の本だとか資料だとかということはなかなか購入も大変なんですけれども、最近はインターネットを通じていろいろな公開が進んでおりますので、いわばネットワークを、文字通り電子ネットワークも通じていろいろなことができるんじゃないかと。もちろん貸し借りの問題から学芸員の研修です。例えば国の博物館がやったことは、子どもの教育に関して台東区と組んで子どものための催しものをしたんですが、私の評価

委員会ではそれは最低の展覧会ということで評価しなかったんですね。やったことも、国のことですからね、何か台東区の子どもと何かやろうということでワークショップをやったんですが、何か屋根の上のガードマンということで鬼瓦を並べたり、こういう点なんかは今、もうはやらないんですよ。では、国は何をすべきかというときには、世界中の子どもの教育が、皆様ご存知だと思いますが、あちこちでギャラリートークと今呼んでおりますが、作品を目の前にして学生、あるいは子どもたちに学芸員たちが語りかけて鑑賞していくということが盛んなんですね。

そういうことの世界の先進例を東博に場をつくって、そこに全国の美術館の人たちがその研修に参加して、世界中の新しい現場のことを知ろうじゃないかということになって、実現できたわけです。つまりナショナルセンターというのはそういう役目があるんだと。個々に台東区の小学校の人とやるということではないんだと、国の立ち位置があるんだということを随分強調したんですが、今、実現しつつあります。それと同じことで、もちろん信濃美術館も自分の館のことをこれからするわけですけども、やっぱり全県下に目を広げようというのが3番目です。

最後はわかりやすいと思いますが、最初に申し上げたとおり、素通りされているこの長野県のところを国際展ができるような規模にして、そういうシステムをつくろうと。これは今度、日本の国際展におけるネットワークの問題がありまして、私も松本市美術館にいたときに何回か国際展をやったんですが、いつも飛ばされてしまうんですね、名古屋に行ってしまうとか、東京に行ってしまう。僕はそれが残念で、いろいろな、テレビ局、マスコミの関係者といい展覧会、会場がいいですからやりませんか、やっただけませんかということで幾つかできましたが、そういうことで考えているのがこの4番目ですね。

特に最近では新幹線もできましたし、それから北陸も頑張っていますが、いろいろ考えてみて、その絵にもありますけれども、うまくいけば北陸も含めて、中部、北陸、信越地方も含めてここを文化の中心に、美術展の中心になる可能性もありますので、これは大きな課題として取り上げて、そしてできたら、当然、現代美術の問題とかいろいろ出てくるわけですけども、将来世界的なアーティストになる、そういう芽が長野県の若手にたくさんいますので積極的に支援して、これも何でそんな若手のものを購入するんだとか、いろいろな議論が出てくるわけですけども、やはり将来のことを考えながら北信越の中心になる若手のアーティストに対する支援もしようというのが、世界水準という意味であります。

これから皆様方からいろいろなご意見が出ると思いますが、細部にわたってはここに書いてあるとおりですが、こんなことで新しい美術館を考えております。どうぞよろしくご審議いただきたいと思っております。

【進行役 石川利江氏】

ありがとうございました。新美術館への大きなイメージを、いろいろ具体例を交えて語っていただきまして、皆さん何か感じるところがあったのではないかと思います。

それでは、報告書の詳細な内容については事務局のほうからお願いいたします。

【文化政策課長 中坪成海】

事務局を務めております、県文化政策課、課長の中坪と申します。どうぞよろしくお願ひいたします。

ただいま竹内委員長さんから新しい美術館のコンセプトについてご説明がございましたので、事務局からは主に施設の面、運営の面について、課題ですとか整備検討委員会での検討結果についてご説明を申し上げたいと思います。

引き続き、今の資料をごらんいただきたいと思いますが、まず1ページのほうに美術館の経緯と現状をまとめております。

本館につきましては、建設されてから今月で満50年を迎えております。所蔵作品が約4,000点、東山魁夷館を含めました年間の入館者数、ここ数年10数万人で推移をしております。管理運営につきましては、県の外郭団体であります長野県文化振興事業団に委託をしております。

それから東山魁夷館、平成2年に開館をいたしまして25年経過でございます。収蔵作品約1,000点でございます。

2ページをごらんいただきたいと思いますが、主な課題ということで、6点に整理をしております。

善光寺に隣接をした恵まれた立地条件でございますが、必ずしも十分な集客につながっておりません。また施設面を申し上げますと、大変老朽化が著しく、バリアフリー化も遅れております。さらに展示室、収蔵庫とも古く手狭でございます、大規模企画展の開催が困難でございます。また、貴重な美術品の管理に支障を来すおそれも生じております。なお東山魁夷館につきましても25年たちまして、経年劣化への対応ですとか、一層のバリアフリー化が求められている状況であります。

このほか、運営面についても県内の他の美術館の支援ですとか、調査研究が十分できていないといった課題がございます。

その上で3ページのほう、先ほど竹内委員長からご説明がありましたとおり、新たな美術館のコンセプトとして4点が掲げられているところでございます。

次のページ以降、それぞれの4つのコンセプトにつきまして詳細に記載をされております。この点についてはそれぞれごらんをいただければというふうに思います。11ページにかけて記載をさせていただいております。

次に12ページから施設整備の考え方をまとめております。5つの観点で整理をされておりますので、13ページ以降、それぞれ観点ごとにご説明をさせていただきます。

まず13ページですけれども、立地条件を活かした整備ということで、善光寺さんに隣接し、城山公園の中に設置されているという立地を十分に活かした整備というものを基本にしまして、これまで長野市さん、善光寺さんにご協力をいただいて検討してきた結果を踏まえまして、図にもございますが、善光寺東庭園から城山公園への動線、この図ですとDというふうに書かれておりますが、善光寺側交差点、特にこの南側の出入り口部分、改良いたしまして人の行き来をやすくして、また見通しもよくすることで双方の回遊性を高めるという提案でございます。

もう一つ、美術館と公園の部分、こちらは共通のコンセプトで県と市で一体的に整備をしていくということが示されております。

14ページをお願いいたします。既存施設との関係ということで、信濃美術館の管理棟、いわゆる本館といわれている部分については全面改築をいたしまして、東山魁夷館についても必要な改修を行った上で、機能性や利便性の面から接続をさせるものでございます。

続いて15ページでございます。施設の配置です。引き続き城山公園内としまして、具体的な配置につきましては、長野市さん、善光寺さんとの協議を踏まえまして設計段階において調整を図るものでございます。具体的にはこのピンクの点線の部分を想定しているところでございます。

16ページをお願いいたします。施設の規模・性能ということで、東山魁夷館を含めまして延べ床面積を12,000平方メートル程度とすることを基本にしまして、設計において調整を図るものでございます。また、国宝ですとか、重要文化財の展示保管に支障のない建物の性能を確保するものでございます。

部門ごとの面積については、下に目安で表を差し上げておりますけれども、この点については詳しくもう1枚、お手もとに資料、こちら差し上げております。信濃美術館の課題と整備検討委員会の方針というものの、1枚物を差し上げておりますので、そちらをごらんいただいて、施設の内容についてご説明を申し上げます。

まず本館でございますけれども、施設全般としまして、建築から50年がたちまして、雨漏り漏水等が発生しておりまして、老朽化が著しく進んでおります。バリアフリー化につきましても、50年以上前の設計でございますので、館内を移動するのに階段を使わなければ移動ができないという構造でございます。現在、簡易的なエレベーターですとかスロープも一部、増設はしておりますけれども、根本的な解決のためには全面改築が必要な状況でございます。

それから展示部門ですけれども、今、常設の展示室がございません。収蔵品の展示の機会が限られております。また企画展示室、現在893平方メートルですけれども、これ3つの展示室になっております。400平方メートル、380平方メートル、110平方メートルという3つの展示室でございまして、それぞれの移動にもやはり階段を使わないと移動ができないということで、面積も狭く、全国規模の巡回展を呼んでくるに大変難しい

施設的环境でございます。

こうしたことから、新美術館におきましては、常設・企画の両方の展示室を備えまして、収蔵品を常時展示できて、また全国規模の巡回展も開催できる環境を整備したいという提案でございます。

収蔵部門につきましては、非常に収蔵庫は狭く、また本来備えているべき機能がございません。将来の収蔵に備えた収蔵庫の増床と、それから重要な美術品を適正に管理できる環境整備が求められているところでございます。

展示収蔵といった基本的な機能に加えまして、新しい県立美術館のコンセプトを実現していくための機能充実ということで、4点、下に掲げておりますが。

学びの支援の拠点となるワークショップ室やアトリエ、講堂などの設置、また県民の皆様が常時作品発表を行える専用の貸しスペースであります、県民ギャラリーの設置、また一般の来館者や県内の美術館の学芸員の方、あるいは研究者の方等が調査研究をしていただく際の支援を行うリサーチセンター、このほか、入館料無料でどなたも気軽に利用していただけるスペースの充実というのもご提案をいただいております。

東山魁夷館、2としてありますが、経年劣化に対応した諸設備の更新、また内外装の修繕のほか、かなり開館時に比べまして収蔵品が増えておりますので、収蔵庫の増床等も行っていく必要があるということでございます。

それでは、先ほどの資料の17ページに、おそれいりますが、お戻りをいただきたいと思っております。

17ページでございます。設計者の選定ですけれども、選定については技術力や経験、設計に臨む体制などについて提案を求めて、すぐれた設計者を選ぶプロポーザル方式を基本とするということが示されているところでございます。

長くなりましたが、最後、18ページをごらんいただきたいと思っております。運営の考え方でございます。

県立美術館の役割、機能を果たしていくための安定した運営体制とスタッフの充実が求められております。現在、指定管理の期間、5年間でございますけれども、この長期化など、継続性をもって美術館の企画運営やスタッフ育成ができる体制を整えていくこと、また学芸員を初めとして、必要な職種のスタッフを充実していくべきとの報告をいただいたところでございます。

以上、整備検討委員会からご報告をいただいた内容を事務局からご説明申し上げます。よろしくお願いいたします。

4 意見交換

【進行役 石川利江氏】

ありがとうございました。ただいま検討の経過及び報告書についてのご説明をいただ

きました。また、課題についてのまとめたものもお示しいただきました。

皆様、これから意見交換に入っていきたいと思いますが、今日の進め方をちょっと簡単にご説明させていただきたいと思います。

最初に質問、今のご説明に対する質問をお受けしまして、それはあまり長くなく質問の時間を終えたいと思っておりますが、その後、美術館としての役割や機能、コンセプト、その辺に関してのご意見をいただきたいと思います。

そして、最後に地域とともに歩む美術館としての善光寺一体のあり方や、善光寺界隈のまちづくり、また文化ゾーンの考え方の中で、どのように美術館やその周りを考えて行くかという点の3つに大きく分けてお話を進めたいと思っておりますので、どうぞよろしく願いいたします。

ただ、どうしても、ランドスケープ・ミュージアムという点では単純に分けられないところもありますが、その辺、皆さんちょっとご配慮いただきながらご発言いただければうれしく思います。

それでは、今、ご説明いただいたところでのご質問などありましたらお願いいたします。またご発言の際には、できましたら、差し支えない程度で結構ですが、お住まいと、それからお名前と、所属している団体がございましたらそれも言っていただけると、発言がより皆さんに届くかと思っておりますので、どうぞよろしく願いいたします。

それでは質問はいかがでしょうか。

【男性A】

長野市に住んでいる者です。

質問は15ページの図で、赤の点でなくて、グリーンの点で囲まれた公園を含めた周辺整備の想定エリア、これをどのように考えておられるのか。私はやっぱり一体化というときに、このある市道ですか、この通りと、それから大きな林というか植栽がございませぬ。あれと全く分断されていますので、ここのところの扱いが一番問題かなと思っております。お願いします。

【進行役 石川利江氏】

この辺、長野市も関係してくるかと思いますが、とりあえず、竹内委員長さんから。

【検討委員会委員長 竹内順一氏】

具体的には、事務局のほうがいいかと。

【県民文化部長 青木 弘】

ありがとうございます。それでは私の、県の立場でございます。若干、長野市の関係も絡んでいる事案でございますけれども、現時点の考え方についてお話をしたいと思い

ます。

一体感ということでのお話でございますけれども、現時点で考えておりますのは、先ほどもちょっと申し上げましたけれども、南のところに歩道橋等もございます。それで交差点になっているわけです。善光寺のほうから見ますと、どこに美術館があるのか全くわからない、そういうような景観でございます。

やはりここは、何としても改善をさせていただかなければいけない点でございますが、ここら辺については、しっかり長野市さんとも協議する中で取り組みをしていかなければいけない。といいますのは、城山公園、それからあそこの周辺の道路は全部市の関係でございます。ですから、県が美術館を建設させていただくとなれば、その辺のところを一緒になって取り組まなければいけない。そうしますと全体の、例えばこれからの話でございますけれども、例えば設計というような形に入ってくるときにどういうふうに、バラバラに設定をしていたのでは一体感が出ませんので、ここら辺については一緒に、例えば設計にこの基本的な部分はかけていくとか、一つには、そういう工夫が必要になってくるかなというふうに思っています。

また市道の関係につきましては、なかなか私ども県の立場で申し上げにくいんですけども、あそこはやはり住民の皆さん方の生活道路でもございますので、簡単にそこをなくすとか、そういうことにはならないというふうに考えてございます。今、申し上げましたように、そういった交差点、それは南北もあるんですけども、そこら辺のところを改良することによって、東庭園と、それから城山公園の回遊性を高めていこうと。こういうことで一体感というのをかもし出していくと、そういう形を、今、考えていただいているところでございます。

【進行役 石川利江氏】

長野市さんの方はいかがでしょうか。

【長野市都市整備部長 轟 邦明氏】

長野市の都市整備部長の轟でございます。城山公園につきましては、基本的に今回の新しい美術館、これとぜひ一体化する、ランドスケープをあわせるような公園にしていきたいと、そういうふうには思っていますが、かといって、公園そのものは地域の皆様の癒しの場です。ですので、基本的な機能そのものはぜひ残させていただきたいと。

その中で、ご質問の真ん中にあります道路です。この道路についてはやはり基本的には残します。ただ今現在、歩道もないような状況ですので、ぜひ何とか歩道の関係は整備させてもらえればうれしいかなと思いますし、先ほど県のほうからご説明ありましたとおり、南側、北側の交差点部分については、ぜひこれは善光寺と城山公園、それから信濃美術館の一体化が増すように見通し、あるいは景観、あるいは渡りやすいような感覚、そういった交差点にぜひ改良させていただきたいなと、その辺はぜひ県と一緒に検

討させてもらいたいと思っております。

【進行役 石川利江氏】

歩道橋も今あまり使われていないと思うのですが、これも撤去とか、そういう方向はあるのでしょうか。

【長野市都市整備部長 轟 邦明氏】

本当は用途を考えると、あるいは道路状況を考えると、なかなか今のまま残すというのは厳しいかなと思いますので、その辺は交差点の改良の中で考えていければと思います。

【進行役 石川利江氏】

ありがとうございました。ほかに質問ありますか。

【男性B】

安曇野市から来た者です。ステンレスの彫刻をつくっております。

私が今までいろいろな美術館とかで疑問に思ったことをちょっと、お話をさせていただければと思っております。

【進行役 石川利江氏】

おそれいりますが、質問でよろしいですか。

【男性B】

国際的なこととか、竹内先生が言われたことについてのことで。まず、道路交通法で許される範囲の大きさの導入線、動線を道路交通法の最大限の大きさにしていただきたいというのがあります。これは低床のトレーラー、幅が3メートルあります。高さが60センチです。それで大体、道路交通法では4メートル50ぐらいが制限の基準になっています、高さが。けども、振動したりするとそこまではないんですけども、そういうのに物を載せて運んでくるというのは、その国際的なイベントだとかいろいろなものに対応するという第一歩ではないかと、私は思っております。

それと、ある美術館のところで展示をしようと思ったら、石畳の石が非常に薄くできていて、大型トラックじゃなくて軽トラックでもあやしいというところもありました。そういうところは、砂を敷いて上に鉄板を引くとか、養生をしなければいけないことが出てきます。

それと動線が曲がっていると非常に危険です。大きなものとかを動かすときにそのものだけじゃなくて、いろいろなものが並んでいることが多いので、動線をできるだけ直

線にして、例えばメインホールまで大型トラックが中へ入っていける、それでまた中に大きなクレーンがあります。15トンとか60トン、その上が確か100トンだったと思いますが、そういうようなものが、同じように入れるだけの耐久性を床につくっておいてほしいと思います。

【検討委員会委員長 竹内順一氏】

では私のほうから。今、男性Bさんは、ステンレスでものすごい迫力のある動物の形とか、もう世界を変えられる、そういうお仕事をしていますから、当然、そういうものが、大きなものが大型彫刻をどう並べるか、あるいはどういうふうにして運べるかということが非常に重要だというふうなお考えだと思います。当然ですね。

今、具体的にここまで決めていきますということとは言えないんですけども、まず作品の搬入搬出ですね、そのときには大型彫刻も耐えられるようなものを考えなくてはいけないということが一つ。それからあと問題は床荷重で、建物が何階になるか、あるいは地下に行くとか、まだこれからなんですけれども、やはり現代彫刻の重さに耐えられるようなことをしようじゃないかということは話題にしております。

例えば、ただ具体的にその美術館の仕様の問題になりまして、今、1平方メートル当たり何キログラムまで耐えられるかということ、今はちょっと、それによってかなりお金も違いますので、私、藝大にいたときには、1平方メートルやっぱり1トンということを目安にしてやったんですね。それからあと上に飾る場合はクレーンが必要だとか、そういうことがある。今、一番考えておりますのは、その加重のほかにはやっぱりエレベーターですね、荷物用のエレベーターをどうするかと、非常に巨大な、人でいうと50人ぐらい入れるようなエレベーターも美術館では当たり前になってきました。

それは現代の進歩ですので、そのことも含めて重量と大きさ、これは今に対応しないといけないうらうと。それから仮にモニュメントのような大きなものを考えるときには庭に置くわけですから、庭に置いたときの安全性、子どもが上ってけがしないようにとか、あるいは搬入しやすくするとか、見やすいということはこれからの問題ですけども。今、話題に上っております、どうしようかということ、これは考えておりますので、新しい美術館ができたなら小さな彫刻しか並べられなかったというようなことはないようによく考えてみたいと思います。

今のところお答えできるのは、その程度のまだあいまいの段階ですけども。

【進行役 石川利江氏】

ありがとうございました。

ご質問に限らせていただいて、あとでまたご意見をいただきたいと思います。それでは後ろの方、どうぞ。

【男性C】

私は長野市の第二住民自治協議会の役員をしております。この城山公園というのは第二地区のエリア内にあるものですから、この建設には大変関心を持っています。今日も周辺の区長さん何人か来ております。

そういう中で、今日は市の部長さんも見えているので、最初に城山公園周辺という問題が出てきたもので、見解をお聞きしたいんですが。

城山公園というのは、長野市民、あるいは長野県民にとって重要なコミュニティの場所として役割を果たしてきたわけです。これは善光寺周辺、善光寺を参拝した人があそこで弁当を広げる、あるいは春は花見、小中学生は写生大会、こういうコミュニティとしての大変重要な場所であるわけなんです。したがって、これは美術館ができたということによってそういった機能が失われてしまうということになれば、これは誰のための美術館だと、こういうことになってくる可能性もある。そして、県民の理解を得られないということにもなりかねないわけですね。したがって、あちこちで美術館なんて見ますと、やたら塀や柵で囲って、マニアックな人たちの一部の空間になっていくというようなことがあってはならないというふうに、私どもは考えております。

それで、あくまでも建物は別として、周辺スペースというものはオープンスペースで、解放されたものであるということが必要なのではないかと、こういうふうに考えておるわけです。

もう一つは、あそこは大変重要な空間であります。それは例えばここで地震が起きたと、災害が起きたといったときは避難場所になっておるわけですが、善光寺周辺には常時何千人という参拝客が入っています。そういったときには大混乱を起こすわけです。空間というのは絶対に保たなければならないということになろうかと思えます。そうしますと、美術館をつかったことによって、そういった制限が出てくるとすれば、それはそれで美術館のためであれば、それは大いにいいんですけども、長野市としても、まだ公園の中で活用されていない部分というが幾つかあるわけです。あの裏にはNHKの跡とか、ああいったところが整備されていない。

こういったところを、失われた機能をそういうところに持って行って、それなりの周辺整備というものを考えていただきたいということは、常々関係者の皆さんには申し上げておりますけれども、この辺の考え方をちょっとお聞かせいただきたいと思えます。

【進行役 石川利江氏】

お願いいたします。

【長野市都市整備部長 轟 邦明氏】

はい、お答えいたします。城山公園一体の再整備については、今回、新しい信濃美術

館の基本的な考え方が出てきましたので、これをもとに、城山公園一体についてももう既に開設から100年を超えています。それからかなりの老朽化した市の施設が幾つかあります。今、ご提案あった城山の旧NHKの跡とか、あるいは蔵春閣とか、あるいは今ある少年科学センター等にしても、施設が老朽化しつつあります。

長野市としてもこれらのさまざまな施設について今後どうすればいいのか、その辺から城山公園一帯をどのような形で再整備していく必要があるのか、ぜひ改めて地域の皆様、あるいは学識経験者、いろいろな皆様を含めて再整備の検討委員会をここで立ち上げさせていただきます。その上で再配置についていろいろ考える、今回の美術館も含めて再配置について考えさせていただきたいというふうに考えています。

【男性C】

そうしましたら、あの地域には、何十年とお住まいになって非常に地域を熟知した方々が何人かおられるわけですが、そういった検討委員会の中に地域の人を加えるということが必要ではないかと思いますが、この辺、どうでしょうか。

【長野市都市整備部長 轟 邦明氏】

地域の代表の方々についてもご参加いただくような形で進めさせたいと思います。

【進行役 石川利江氏】

ありがとうございます。それでは、もう一度、この基本方針の先ほどのご説明に関してわからない部分がもしありましたらお願いいたします。では、その女性の方どうぞ。

【女性A】

大変初歩的な基本的な質問で恐縮なんですけれども、この計画は大体、何年ぐらいの予定で始まったものか。大体27年からこれが始まって、27年の4月ですか、第1回の会合とかがあったみたいなんですけど、今、1年半たっていますよね。今後、大体目安として、どのぐらいの目安で完成を予定にしているか。

例えば東京オリンピックはあと4年後ですよ。善光寺さんの御開帳も、あと何年後にありますよね。そういう何か目標がなくて、ただ漠然と動いていっても、実際に軌道に乗れるかどうかちょっと心配になるんですけども。

私たち長野県華道教育会と申しまして、全県でやっている華道の集まりなんですけど、7年に一度、長野で大きな華展をやるんです。これが、例えばこういう完成に間に合うとすれば、ぜひそういう行事も入れていきたいなという目安があるんですけども、大体の目標をお聞かせいただければと思ひまして、よろしくお願いいたします。

【県民文化部長 青木 弘】

ありがとうございました。実は私ども、今日で3回目のこういった意見交換会、タウンミーティングは知事参加で初めてでございますけれども、これまでも伊那とか佐久でも行わせていただきました。その都度、会場の皆様方から今の点は必ずお尋ねがございました。

私ども現在、整備検討委員会から「基本方針」をいただきました、9月の時点です。それで議会を挟みまして、こうした意見交換会をさせていただいておりますが、この意見を踏まえまして、今後、基本構想をできるだけ早くつくってまいりたいというふうに考えているところでございまして、その基本構想の中で、今、おっしゃられましたようなスケジュール感というものも、できましたらそこに盛り込ませていただきたいというふうに思っております。

そういうことで、なかなかすぐにお答えできなくて大変恐縮ではございますけれども、大変お気持ちはよくわかりますけれども、もうしばらくちょっとお時間をちょうだいしたいなというふうに考えているところでございまして。また、明日も松本でまたこうした意見交換をさせていただきまして、それらを踏まえまして、ちょっと基本構想の中でしっかりと考えていきたいなというふうに考えているところでございます。

【女性A】

ゆっくり速やかにお願いいたしたいと思います。

【進行役 石川利江氏】

もう少しお待ちください。質問、ほかにございますか。ではお願いいたします。

【男性D】

長野市でデザインの会社を営んでいる者です。私たちは昨年からグループをつくりまして、城山公園全体のランドデザインということで検討を始めて、いろいろご提案なんかもさせていただいているんですが。

その中で、計画の中でいいますと、今、これは15ページの計画の中にある、ブルーの庭というのが、今回の美術館の整備のエリアというふうに設定されているわけなんですけれども。これだけだと、基本的にこれまで検討されているランドスケープ・ミュージアムという、割とスケール感のあるものはこの中ではとても難しいのではないかと。さらに、美術館そのものが現在の2.5倍ぐらいの規模をお考えのようですので、おそらく公園の機能という部分が、ここのエリアだけでは活性化させていくことは不可能だと思うんですね。

そうしますと、先ほどもお話し出ていましたように、市のほうのかかわりの部分まで含めてランドスケープ・ミュージアムという捉え方で計画されておられるのかどうか、

その付近もちょっとお聞きしたいなと思っております。

【進行役 石川利江氏】

よろしいですか。

【県民文化部長 青木 弘】

ありがとうございました。城山公園、先ほども長野市の部長さんからもお話がございましたように課題がございまして、今後、市民の皆さん方も参加していただく中で、ランドデザインの検討会を進めさせていただくというお話をいただいたところございまして、ある面ではそういった大きな、一体の整備をどうするかということが今後、その検討が進められていくわけでございます。一方、この四角のエリア、いわゆる城山公園、市道で囲まれたエリアについては、ある面では一部先行させていただいて、今、整備計画が進んできているというか、この整備の検討が進められているということでございます。

ランドスケープの概念がございまして、今後は、その一体の山並みも含めて善光寺とか、それから東山魁夷館というものと調和というものを、これはおそらく設計の段階という段階ではきちんとそれを踏まえたものに、建物も公園もイメージされてくるんだらうというふうに思っておりますので、そういった中では、いわゆる全体を見渡したといいますか、その全体の空間、エリアをにらんだ形での設計というものにだんだん移ってくるんだらうというふうに思いますので、そうした中でお尋ねのこと、直接、お答えしていないのかもしれませんが、生かしていけるのではないかなというふうに、また生かしていかなければいけないのではないかなというふうに考えております。

一方を先行させますけれども、それと同時に並行して城山公園全体の計画もあわせて、並行的に進んでいくというふうにお考えいただけますと、概念の整理といいますか、考え方の整理がおわかりいただけるのではないかなというふうに思っております。

【男性D】

ということは、この一角だけではなくて、ここにお見えですけれども、善光寺さんと城山公園全体まで含めたところで、ランドスケープ・ミュージアムという捉え方にしていこうという計画と考えてよろしいでしょうか。

【検討委員会委員長 竹内順一氏】

おっしゃるとおり、それを想定しております。ただ、今、美術館、どんな建物にするかということを中心にやりましたので、もちろん長野市さんもこの委員会に入ってきていただいておりますけれども、都市計画とかいろいろなものにかかわってきますと、美

術館のためだけの委員会だけでは絶対解決できませんので、そこは今、青木部長が言われたように全体的に、それを視野に入れてやっていく。

つまり、スケール感のことが出てきますが、建物一つではありませんので、この際、いろいろな課題が山積みされていると思うんですけれども、全体を見ていただいて、特に私ども考えますのは、よそから来た人は、ここは市の公園、ここは県の何とかとか、ここは善光寺さんとか、あまり考えませんのでね。来ていいところだなという印象を持つためにはどうしたらいいかということがありますので。

準備段階、あるいは検討段階ではきちんとそこは区別していきます、いかないといけないんですけれども、今、話が出たようにランドデザインをどうするか、しかもまた、当然、住んでいる方々との合意を得なければいけませんので、そこはこれから難題だと思いますけれども、全体を見ようというふうに考えております。

どこまで入るのかということは、ちょっと今、ここでは申し上げられませんが、全体を考えようというふうに思っております。

【男性E】

長野市の者です。県展でしょっちゅう信濃美術館をお借りしています。僕は書家なので、書道の作品の展覧会に信濃美術館を何よりも発表の場所として今まで利用させていただいておりますし、新しい美術館ができることを何よりも、誰よりも望んでいる者の一人なんです。そこでちょっと、さっき若干説明ありましたけれども、ちょっとお聞きしたいことがあるんですけれども。

今、これメーターで、平面でいうと2.5倍と大変大きくなるんだなということに大変期待を持っているんですけれど、大きな展覧会をしたい、今でいう第一展示室と第二展示室、二つありますけれども、これを、この規模よりも広くなる、もっとそのところをもう少し知りたいなと思っております。

こういう市民に常時発表できる専門、ギャラリーが500平方メートルって書いてありますけれども、これどのくらいの広さなのだろうかということが一つ気になりますし、外から大きな展覧会をやりたい。今、私のざっと頭の中で申し上げると、今の美術館の第一展示室と第二展示室、あれよりももっと広いスペースの会場が借りられたらというふうに思っているんです。その辺のことをもう少し、展覧会、貸館で借りるのがギャラリーとどういう関係があるのかどうかという、そのことを一つお聞きしたいと思います。

それから、部屋は広いんですけれども、つまり、パネルの問題が一つあります。今でも第一展示室のところに、あそこにパネルを、美術館にあるパネルを借りて立てていますが、あれがおそろしく重い。あれを立てるために業者さんに相当な費用を払わなければならない。あるいは、第二展示室を借りても、あそこに壁面をつくる時に、町の業者に相当な費用をかけて壁をつくってもらわなければならないということで、建物そのものの使用料は、県のことですから、割合に廉価で借りられるんですけれども、

パネルをつくるのに貸館、美術館以上にお金がかかっているということで、実は何十年も過ごしてまいりました。

そういうことから、内装まで今ここで質問で触れていいのかどうかちょっと心配ですが、その辺のことをどういうふうにお考えになっているのか、ということをお尋ねしたいと思います。

【検討委員会委員長 竹内順一氏】

それでは、私のほうから。今、ご質問のところを出たんですけれども、16ページのところに、展示、収蔵の主な施設の面積が出ておりまして、今のところでは、教育普及のところ、これ3番目ですが表の、県民ギャラリー【貸しスペース】500、それから講堂300、ワークショップが200と出ています。このあたりのことも含めたご質問だと思いますが。今、展示室の面積と、それから今のお話のように、壁面の長さの問題があるんですね。多分、あとでまたいろいろなご意見が出ると予想しているんですけれども。

県展の場合はやはり相当なメーター数はほしいというようなお話は今まで何っているんですね。ですから、今、考えておりますのは、この段階で貸しギャラリーに何平方メートル、あるいは何壁面を提供しますということはちょっと書けないので、今の段階で、この貸しスペースが500平方メートルと書いていますが、今考えているのは、ワークショップを含めてあるときに連続できるような、つまりこの面積で、500、300、200というのが一緒に使えるような機能もどうだろうということも考えておりますので、貸すスペースが500平方メートルだけに限るという意味ではないんですね。今のお話だと、500平方メートルでは狭すぎて、とても受け入れられないとか、使えないというご意見になるんじゃないかと思うので、その辺は有機的に機能的につながるようなことを今、考えております。

ただ、これは今度運営の問題になりますけれども、書道展とか華道展とか、あるいは県展のことをたっぷりとして、やっていないときはどうするんだということの運営の問題が出てくるわけですね。ですから、そのところは県立の美術館の非常に難しいところで、美術館独自で考えてみても、世界的な展覧会をやりたいとき、たまたまもう占有物があって展覧会を約束しているので、その展覧会はできませんということでも困るわけです。それで、これから海外の美術館と新しいスタッフはいろいろ交渉すると思いますけれども、やっぱり相手の、例えばどこの美術館でもいいですが、スペインのどどこ美術館だとか、あるいはオランダのどどこ美術館がこのときだったら信濃美術館に持っていてもいいですよという時期があるわけです。そのときに例えば県展があるためにできませんとは言えないので、そこはきちんと機能分化した上で向けられるようなことをしないとだめだろうということは、今一番大事な問題として考えています。せっかく新しい美術館ができて、パネルのこともうまくいなくて何のための美術館だということになるといけないので、そこは考えます。

今のパネルの話は非常に重要で、今、日進月歩でいろいろないいパネルが出ているんですね。ですから、業者さんに日当幾ら払ってやることもわかります。今までのご経験大変だったと思いますけれども、簡単に手で押せて移動できるということは、多目的ということは無目的で、あまり展示の環境として感動を呼ばないことがありますので、ある程度制限をしながらそれぞれの書道展とか華道展とか、華道展の場合は床、机といただきますか、平面の部分がほしいので、壁面中心の人と、それから立体物の場合はどうするかとか、いろいろなことをこれから、その展示補助台、あるいは照明の問題も考えなくてはいけないので、そこは、元へ戻りますけれども、このギャラリースペースを有効に使えるような、ほかの部屋との連動がうまくいけるようなことを機能で持っていて、有機的に飾ったり、他の目的で使うというようなことができるようにしようというふうに考えております。

特に県展も初めとして華道展、あるいは書道展を、一度展覧会をすると来年も同じ時期に同じ場所というふうに定着といいますか、それがないと、またいつこのスペースが借りられるかわかりませんでは、公募展なり、そういった性質上、ある程度固定的なものも必要なわけです。固定的なことをあまり広げられると、では美術館の本来の仕事がその固定的なもののために犠牲になってうまくいかないということでも困ります。その辺をうまく、それは予算があって展示室がたくさんできればいいんですけども、それもいけないので、ここから予算の問題を含めて、あるいは仕様のことを含めて、これから設定段階で、何とかこのところは知恵を出していこうというふうに考えています。今のところ、そのぐらいでしか答えられません。

【男性E】

結構です。いわゆる企画展、世界的に有名な企画展と、県内の作家の展覧会、県展、これ書道でなくて絵画展もそうですけれども、そういう大きな展覧会がたくさんありますので、それとの借りられる時期の問題もありますけれども、そここの調整はどうぞお考えいただきたいと、そんなふうに思っております。ありがとうございました。

【進行役 石川利江氏】

ありがとうございます。質問というよりは、ご意見に入っていると思いますので、一応、質問という時間を考えておりましたが、先ほど基本方針のコンセプトについてご説明がありましたが、美術館としての役割、機能に対するご意見をまずいただきたいと思います。もちろん質問がもしあれば質問も入れていただいて結構です。お願いいたします。はい、それでは、そちらの方、お願いいたします。

【男性F】

ありがとうございます。大町市の者です。いささか離れておりました、今まで皆さん

の意見を聞いていると、長野市のことというように聞こえて仕方がないんです。

県政タウン、県政ですね。忙しい知事さんを座らせて、長野市の話をして寂しいものですから。時間がくれば、ちゃっちゃと帰ろうかなと思っていたんですが、聞いていると本当にもったいない、あの城山公園の話と、それより最初に竹内先生の言われた、各地域の競走というんですか、そこにもって行くんだったらうちへも持ってこいと言われないように、県の美術館をつくるという、本当の意味の正しい姿勢をきちんと出すと。

長野市民の度量の広さを示していただいて、城山公園の形を変えてでも立派な美術館をつくっていただければという、その辺、いかがでしょうか。

【進行役 石川利江氏】

ありがとうございます。

【長野県知事 阿部守一】

私が答えましょう。ちょっと私のあまり出番がないので質問いただいたんだと思いますけれども。

まさにこれ竹内委員長も先ほどおっしゃっていただいたように、信濃美術館が信濃美術館のことだけしか考えていない状況はいけないというふうに思っています。また、これ県立美術館でありますから、やっぱり長野市の皆さんには、その地元の皆さんとしてしっかり受け入れてとけこむものにしていきたいというふうに思いますし、それと同時に、やっぱり広い長野県内の皆さん、多くの皆さんにとって親しみを持ってもらえるようなものにしていかなければいけないというふうに思います。

ここの基本方針の中にも巡回展の実施であったり、あるいは子どもたちの教育での活用であったり、そうしたことが書かれていますけれども、先ほど申し上げたように、皆さんからいろいろご意見をいただく中で、そうしたものも踏まえて基本構想、県としてつくっていくこととなりますので、そうした過程においてはやはり、これは県が県立美術館として設置していくんだということをしっかり私も認識しながらこの基本構想を書いていきますし、そういうふうに多くの県民の皆さんに受けとめていただけるようなものにしていきたいというふうに思いますので、よろしく願いいたします。

【男性F】

ありがとうございました。余分なことを言ったようですが、自分でまだ認識していない世界に素晴らしいものが横たわっているということに自覚して、美術館をつくっていただければありがたいと思いますが、よろしく願いいたします。

【進行役 石川利江氏】

ありがとうございました。ほかに。

【男性G】

最初に、今の県民のということですが、私、自分が今、飯田から単身赴任でここへ来ているものですから、率直にまず素朴な疑問は、その国際的なものを呼べるような美術館をここにつくる意味ですね。飯田の場合には間もなくリニアという可能性があるものですから、そういう意味でいうと、より大きな国際的なものが開ける美術館を求めるとすれば、何もここでなくてもということが率直にあります。

ですから、その国際的な美術館のものを開ける美術館ということだけをコンセプトの置かれるとすれば、県民が愛着を持てるというものにはならないのかなということを感じるんですね。

やっぱり県民が自分たちの身銭を切ってもこの美術館を支えていきたいとかという、そういう思いを持てるのは、私としては、どちらかという、美術館の見えない部分のバックヤードのところにとどれだけ県民に価値のある財産を置けるかとか、あるいはそれを修復しながら後に残していけるかという、いわゆるバックヤードの問題だと思うんですね。歴史館にもそういうものがありますが、県民の文化財を保存する、収集する、継いでいくという、その部分のコンセプトが今回の提案の中には見えてこないような気がするんですね。

私は文化財行政というか文化財保護の砦というのが、美術館や博物館にあると思うんですが、その意味での意気込みというんですか、そういうことをコンセプトの中に盛り込んでいただくと、私はやっぱり県民というのは、国際的なおもしろい展示を見たからお金を出すかではなくて、こういったバックヤードの厚みというんですか、県の文化財をここまで守ってくれているんだということについて最終的にお金を投資するんじゃないかということを感じるんですね。

その意味でちょっと提案なんですけれども、バックヤードというのは物理的に実際に物を収めている場所という意味もありますし、職員の方がそういったいわゆる、外の展示ではなくて、文化財の保護のためにコツコツと館の中で動いている部分もあると思うんですが、そういうところをぜひ可視化というんですか、見てもらえるような工夫はできないかと思うんですね。もちろんバックヤードにトコトコ人が入っていくというのは文化財保護の問題はあるんですが、やはりぎりぎりのところまでは、子どもたちも一般の県民もここまでやっているんだと、ここまで文化財を保護するために、あるいは価値のあるものを見つけて収集していくんだということを見れるという、そういう配慮というんですか、あるいはそのためのうまい動線をつくったりとかということがやれるといいのかなということを思います。同時に何を集めるのかと。新しい美術館のバックヤードは県民にとって何が集まっていて、それはどれだけ価値があるかということをぜひアピールしていただけるとうれいかなと思うんですね。それが、やっぱり飯田にしようがどこにしようが、ここは私たちの美術館だという気持ちになれる唯一かと思うんですね。

ひとつそういうことで、バックヤードのあり方についてのぜひ見解をお話しいただきたい、あるいは、これから煮詰めていただきたい。

もう一つは、地域を取り上げるということは、文学も歴史も美術品もみんなどうしても含まざるを得ないので、ぜひ、旧来の美術館のイメージではなくて、この新しい美術館は、それこそ文学も歴史もみんな含んだものが展示できるような工夫と、それから、学芸員の方にはぜひ、そういう意味で幅広い見識、同時に、もう少し具体的に言ってしまうと、3館、県立という名前ものがありますが、ぜひ交流をしっかりとっていただけるようなそんな配慮をいただきたい。今回の、今の提案の中にも美術館としての、美術館同士の交流のことは出ていましたが、歴史館とか図書館とか、県立のそういった3館がより交流をし合いながら、お互いにそれぞれいいものを展示しあったり、力をあわせていけるようなこともぜひ、これからのコンセプトを煮詰めていく中で考えていただけるとありがたいなというふうに思います。

2点、バックヤードの件と、そういった美術というジャンルを超えて関わっていくためのまた取り組みをぜひということで、お願いいたします。以上です。

【検討委員会委員長 竹内順一氏】

それは内容にかかることですので、私のほうから。

今のご意見は大きく3つほどあったんですが、最初のバックヤードの可視化ということとは、今、簡単にいうと裏側をどう見せるかということですね。もっといえば、蔵を、所蔵庫を可視化できるかどうかということになりまして、今、歴史系の博物館、美術系も含めて、今、蔵を全部見せているのは九州の国立博物館、九博、国立九州の博物館は蔵まで見られると。それから美術品の修理をしている作業現場もアトリエも外から見学で見られるということになっておりまして。当然、この裏側を見せる可視化ということとは、当然今の、現代の美術館における大きな機能として求められておりますので、それから構造的にもアクリルのガラスが進歩したとか、それから空調も、見せても変わらないようになるかということ、昔のガラス張りとは違いますので、そこはハードの面で対応できると思います。当然、現代美術などは、製作現場から蔵の中に収まっている様子まで、今、見せたいというようなことが出てくるんじゃないかと、当然、可視化は今、課題にしております。

それから、次が地域文化と、それから国際展との関係というようなことをおっしゃっていただいたんですけども。私ども考えているのは、インターナショナルなものというのは無国籍ではなくて、本当にローカルなものに根ざしているから、それがよくてインターナショナルになるんですね。つまり決してローカルなというんですか、地域に根ざしたものとインターナショナルは矛盾しないんですね。本当に世界的に訴えらるだけ地元のもの、ローカルな要素をいかにとれるか、わかりやすくすることだと思っておりますので、ここは今の学芸員たちはそんなところは一番踏まえていると

思いますので、何とかやっつけていけるだろう、あまり心配要らないだろうと思います。

それで最後のご質問で、そういう歴史文化と、あるいは文学ですね、それと美術の交流はどうかということですが、実は今の新しい展覧会というのはその境目をなくして、ここは歴史だから、ここは文学だから展示に向かない、美術展に向かないということではなくて、それ乗り越えたものが非常に、クロスオーバーといいますか、そういう企画が非常に多いんです。またいい企画も多いですね。

ですから、例えば平家物語という物語があったら、それを絵画化する。そして文学を味わいながら、またその歴史であるとか、あるいは源氏物語なんていうのは完全に文学と美術が一体化しておりますよね。そういうことになりますので、これはやっぱり、今度これから入ってくださる、あるいは今いる学芸員たちに期待して、文学と美術、あるいは今度は宗教の問題も当然出てきますから、それは各分野、各ジャンルにとらわれなくて全体を見るようなことは、これは現代の美術展の流行ですので、多分、ご期待に沿えるだろうと思います。

ただ、あくまでも文化財と、そういう古文化財、歴史的な古文化財と現代美術はそうはなかなか同居できないところがありますので、そこはやっぱりできない文化財展示もあると思います。そのところは、これから工夫していこうじゃないかと思っております。

【長野県知事 阿部守一】

歴史館と美術館と図書館との話。まあ、先ほど文化芸術に力を入れていかなければという冒頭の話の中で、文化振興事業団の話ばかりしてしまったんですけども。まさに歴史館に笹本館長をお迎えし、そして今、県立長野図書館は平賀館長、ちょっと語弊があるかもしれないですけども、県の職員だった県のOBが肅々と仕事をするのではなくて、やっぱり笹本さんにも平賀さんにも非常に独自の取り組みをしていただけているというふうに思っています。

県民の皆さんにはあの人事が一つの私のメッセージだというふうにぜひ受けとっていただきたいというふうに思いますし、この信濃美術館も、先ほど委員長からもお話しいただいたように、運営の仕方も今までとは変えていかなければいけないと思っていますし、まさに県の施設としての美術館、歴史館、図書館、少しずつ違ったところを担ってはもらっていますけれども、しかしながら、一体として長野県の文化芸術、こうしたものを担っていただく施設だというふうに思っていますので、そういう意味でしっかり連携をとるように、私も意識して進めていきたいというふうに思っています。よろしく願いいたします。

【進行役 石川利江氏】

ほかに、それではお願いいたします。

【男性H】

上田から来ました。障がいのある人たちの表現活動を応援するという趣旨で活動しております。

一つ、これはハードというか、もしかしたらそもそも論になってしまうのかもしれませんが、この最初の表紙、1番のところになな課題というところで、善光寺の来訪者が年間600万人に対して美術館入館者が5年で17万人という、こういう数字が書かれていますが、ここのなぜこんなに少ないのかという分析はされているのでしょうかということです。

僕は障がいのある人やその家族、あるいは、僕は田舎に住んでいますから、隣のおじさん、おばさんとか、いろいろな話をする中で、美術ってなんだい、アートってなんだいという、ではその人たちが美術館にすごい作品展が来たとしても足を運ぶだろうか、いつも思うわけです。つまり、美術は文化芸術とかという世界がまだまだ、日本全体としてもそうだと思うんですが、まだまだ一般化していないというか、もっと身近な人たちが美術品を本当に鑑賞したり、それからもう一つ大事なものは、僕は表現をする、そういう場があまりにもない。美術教育で学校で美術を習ったんだけど、では卒業してからどれほどの、大人になってどれほどの人たちが表現をすることを、それは趣味でも結構ですけども、楽しんでいるのだろうか。そういう、もっと下支えみたいな、地べたを本当に耕していくような活動をしないと、実は、日本だけじゃなくて、特に長野県というわけではないんですが、もっと美術館に足を運ぶ人が増えてくるのではないだろうかというふうにすごく思います。

ですから、今度のコンセプトの中に、僕は美術教育的な部分があるアトリエを用意するとか、ワークショップ室があると書いてありましたが、では、あれは長野市民の人たちくらいしか使えないだろうと思うんですね、足を運ぶわけですから。遠く飯田やあっちのほうではなかなかできない。むしろ、僕は機能として持っていたきたいのはデリバリーをしていただきたい。つまり出前です。もっとそういう、この作品ってこんなふうに鑑賞したらおもしろいよねとか、あるいはこういう絵を描いて、全然、絵なんて苦手だと思っ人たちが、実はこういう工夫をしたらすごいおもしろい絵が描けたよね、みたいなワークショップをもっともっと、そんな高度な技術という問題ではなくて、色を塗るだけでも楽しいんだということを広めていく活動が僕はとっても大事だと思っていますので、そういうことをもう少し、機能としては持っていたければありがたいなと思いました。

【進行役 石川利江氏】

ありがとうございます。私の聞き間違いかもしれませんが、5年間で17万人ではなくて、年間平均して17万人ということだと思っます。

今の出前のワークショップとか、その辺はまたまとめてご意見をいただくようにいた

します。そのほかにいかがでしょうか。ではそちらでお願いいたします。

【男性 I】

一市民の長野市に住んでいる者です。

先ほどの関連の質問であります。竹内委員長さんたちの検討の中で何か100万人を呼びたいというようなお話があったようですが、その裏づけと根拠と、それからそれはまだこれから検討するとしても、どの辺の目標、誘客目標ですね、それはどんなふうにするのかとか、そういうことを教えていただきたい。

それからついでに、事業規模とかいろいろ、らしきものが出てきております。本当に間に合わせなければいけない時期というのはいつまでを考えておられるのか、この2点をちょっと教えてください。

【検討委員会委員長 竹内順一氏】

それでは、前半の目標入館者数が100万人というふうに聞いているけれども、一体、それどうなんだということだと思えますが。

これとても重要な問題で、具体的にペーパーにしてその根拠を示すというようなことはしていないんですけれども、そのくらいの勢いの美術館にしないと、これからやっていけないだろうということですね。新しいうちは少しはめずらしがって来てくださるかもしれませんが、やっぱり本当に地についていないと、人はいらっしやってくれないんじゃないかと思えます。

今、全国の美術館の大きな流れで見ると、100万人を私は決して夢物語でなくて、やりようによっては可能だと思うんですね。それには今のような学芸員の、例えば正規学芸員は7名とかそういうことでは絶対できないので、今、100万人説は多分、知事のほうもお考えではないかと思えますので、変な言い方ですけども、それを金科玉条、目標にして、大いにスタッフと施設の充実に向けて受け入れ体制を整えると。先ほどのデリバリーサービスのこともありますが、やっぱりこれ人なんですね、人と予算があるかどうかということを考えておりますので。私は、その100万人の目標で、大いにそれはやろうということで掲げたいというふうに私は思っております。

それから、ご質問であれでしたけれども、デリバリーサービスと言えば出前講座、出前美術展ですね。これは、今のことですからスタッフが充実していけば十分できるし、それから出前講座といっても、単に美術展をやるんじゃないで、あちこちでワークショップをするということで、それはぜひ今度の新しい美術館の課題となっております。それを一言で教育プログラムというふうに呼んで、ここに書いてありますけれども、小学校の3年生にはこういうことをすればこういう成果があるという実績が重要ですので、ただ行ってお絵かき教室をやればよいというもんじゃなくて、県立ならではの今までできなかった形のそのノウハウを高めて、そして経験を積んでいって、教育プログラムを

専門につくり、それを実施する人々のスタッフを考えておりますので、それで先ほどのご質問にちょっとお答えになるんじゃないかと思いますが。100万人は大事なことで、あるいは青木部長とかどうですか、知事とか。

【男性Ⅰ】

ついでに、いつまでに間に合わせなければいけないかという。

【県民文化部長 青木 弘】

それでは開設時期ということでのお尋ねですけれども、これは先ほども、申しわけないですけれども、お答えをさせていただいたようには思います。現時点でいつということはまだ明示する段階ではないのでございますけれども、これから基本構想を策定に向けて私ども頑張りたいと思っておりますので・・・

【男性Ⅰ】

基本構想はいつごろまでにつくられる予定ですか、それから計画マップはできているでしょうか。

【県民文化部長 青木 弘】

できるだけ早期にという感覚でお話を今させていただいているところでございます。

こうしたご意見を聞かせていただいております。それで私どもの基本となる基本方針もいただいているところでございます。そういった中で、それも踏まえながら、両方踏まえながら検討作業をできるだけ早く進めさせていただきたいというふうに思っております。

【長野県知事 阿部守一】

そういう意味で、方針が出て、今、構想をつくるという段階なので、逆に、いやいつまでに間に合わせなければいけないんじゃないかというご意見があればもっとどんどん出していただいたほうが、我々検討するのには参考になります。

100万人の話は、これは竹内委員長を初め委員会の皆様方から私に、それぐらいの意気込みでやれというふうにつきつけられているものだろうなというふうに受けとめていきますけれども、これちょっと、私としては、それぐらいの意気込みで取り組みというふうに受けとめていますので。

これ銀座NAGANOをつくる時も、目標者数をどうしようとか、売上目標はどうしようかというのが実はあったんですけれども。例えば銀座NAGANOの場合は、例えばほかの県のアンテナショップみたいに、売れ筋商品をいっぱい置いて、とにかく物が売ればいいやという話にはしなかったんですね。売れそうな物ばかり売れば売

れる、売れるし、人も来るけれども、そうじゃなくて、やっぱり物とか人とかということがちゃんと発信できて、多くの皆さんをつなげる場にしようということで目標設定しました。

まあ、今回の美術館もこの100万人目標ということは、私に対してそれぐらいちゃんとやれということで受けとめて、我々実際にこれから進めていく段階では、いろいろなことを含めて考えていかなければいけないと思います。ただ、私はやっぱり、ある程度積極的なポジティブな目標設定していかなければいけないなというふうに思います。

ただ、先ほどのアウトリーチみたいな話もあるので、あと、まだ今の時点で、先ほどからいろいろご提案いただいているような部屋割りをどうするかとか、どういう形で運用するかというのは、まだもう少し詰めなければいけないところがありますので、そういうものをしっかりとまず形にしていくということが、今、我々が取り組んでいる状況ですので、そういう意味でちょっとご理解いただければというふうに思います。

【男性 I】

もう1点だけちょっとよろしいですか、質問で。素晴らしいものをつくるとすると、お金がかかります。民間資金の導入みたいなものは、竹内委員長のほう、議論の中にはありますでしょうか。

【検討委員会委員長 竹内順一氏】

今、具体的にこういうやり方をしようということは、今、出ておりませんが、あちこちでそういう声が非常に聞かれるんですね。それで昔の例えば美術館をつくる時に、例えばこちらでは安曇野の碌山美術館のときにはみんな小学生まで、私もそのころ小学生で15円ぐらい出した覚えがあります。募金で始めたんですね。

それからこの信濃美術館ができる时候にもSBCが大キャンペーンをやっておりまして、みんなもう少し、年はとっていましたが、みんな協力しましたので、長野県の美術館というのはそういうところだなと、今から思うと非常に感心しておりますが。

ただ、最近の集め方は、インターネットを使ってクラウドファンディングというような新しいやり方がありまして、非常に展覧会とか、そういう美術展、美術関係がそれで成功している例が幾つか出てきたわけです。ですから今度は、まだそこまで今、財政当局とこうしようとかという話にはなっていませんが、当然、民間からの資金の提供、それから、私どもとすれば、これはそもそもこのSBCとか信濃毎日新聞、信毎さんが始めた美術館がそもそもスタートでありましたので、まだそこまで私どもはまだお願いはしていないんですけれども、また原点に戻って、やはり県内のマスコミとして大いに応援してくれませんかとか、キャンペーンを張ってくれませんかということは、この次の段階で行こうかということで考えておりますから、当然、頭に入れていきます。

【進行役 石川利江氏】

ありがとうございます。

【男性B】

確認したいと思うんですけども。ここに県の観光課がないのが私はもったいないと思っております。大抵、美術館というのは地域にプライドであって、少しくぬぼれがあってもいいはずだと思っているんですね。そういうものを一番発信するのは観光じゃないかと。観光行政の発信力をこれに重ねていただければ、相当発信力が変わるんじゃないか。そうすると、知事さんの言っていた100万人構想も達成できるんじゃないかというふうに思います。

いろいろなイベントのところは、文化行政というよりも、どっちかというところ、観光行政に近いんじゃないかという気がします。そういう点では、こういうところに観光企画というような方が横に座っていても私はおかしくないと思うんですが、どうでしょうか。

【進行役 石川利江氏】

ありがとうございます。

【長野県知事 阿部守一】

ええ、全く私もそのとおりだと思います。観光の観点でこの美術館、この信濃美術館の話だけではなくて、実は県内に美術館・博物館たくさん存在して、そしてそれぞれの美術館・博物館がいろいろな取り組みをされています。

今まで、さっきちょっと文化芸術が弱かったというお話をしたのと同じ観点で、その観光と文化、結びつける視点が、率直に言って弱かったというふうに思っています。そういう意味で、今、観光部では観光戦略をどうしようかということを考えていますけれども、もちろん長野県の売りは、一つは雄大な自然だと思っています。ただ、これは北海道とか沖縄と、これ観光戦略なので他県、他地域との差別化を考えなければいけないので、長野県はやっぱり日本固有の文化というか、やっぱり日本の原風景があると。そういう意味では文化という視点であったり、それから美術館・博物館であったり、あるいは地域に伝承されている民族芸能やお祭りであったり、あるいはサイトウキネンを初めとするいろいろな音楽祭だったり、こうしたものをもっと観光の視点で組み込んでいきたいというふうに思っています。

ですから、この信濃美術館の話についても、県民文化部が担当していますけれども、これ誘客という観点では、観光部にもしっかりコミットさせて取り組んでいくようにしたいと思います。

【進行役 石川利江氏】

ありがとうございます。本当におっしゃるとおり、観光とアートというのは、昨今のアートフェスなどの状況を見ていまして、分かちがたいものであるというふうに思いますので、これからの課題だと思います。ありがとうございました。

それでは、どうぞ。

【男性J】

長野市の者です。一つ、素朴な疑問なんですけれども、100万人の美術館にするのに1万平方メートル、3,000坪の施設で足り得るだろうか、それが1点です。

それからもう一つ、世界水準の作品展示、これをこなしていくのにこの規模でいいだろうか。そして、それをおもてなしするランドスケープとして、この程度の面積の範囲でいいのだろうか。

もっともっと、この城山公園というのは起伏があつたたり、さまざまなすばらしいものがいっぱいあるような気がするんですけれども、そこまで含めてのお考えというものに持っていけないだろうかということをお尋ねいたします。

【検討委員会委員長 竹内順一氏】

それでは、みんなで答えますけれども、最初だけ、一つだけ。

今、この面積を考えているのは展示室の面積なんです。これからできるであろう美術館は、展示室も建物もちゃんとしているけれども、周りもあわせて、建物と風景と一緒にですので、それで考えておりますので。足りる、足りないは、私はこの規模の展示室は非常に平均的な県立美術館の、日本の、ほかの美術館と比べてもそんな決して小さくはないので、また大きければ大変な、運営のことも考えなくてははいけませんけれども。身の丈に合った、いいこの風景の中にとけ込む美術館としてできるんじゃないかと思っております。

当然、今度はスタッフの問題も出てきますが、それを運営する。それは当然、これから考えていくと思います。

【県民文化部長 青木 弘】

今、100万人云々という話というのを絡めたお話でございました。

実は今年、ご案内とおり、信濃美術館はその規模で頑張ってくださいまして、「ジブリの立体建造物展」を開催させていただきました。わずかな期間でございましたが、2か月余の間に13万1,000人を記録させていただいているところでございます。

現在のあれだけの施設でいかに職員が頑張っていたかという、一つのあかしでもありますので、やっぱりこれからは、やっぱり職員の皆様方、スタッフの充実ということもやっぱり非常に大事でございまして、単なる建物だけではなくて、こういった取

り組みができるかということは非常に大事だというふうに私どもも思っています。一つの実践例もできましたし。それから、東山魁夷館が開館したときに、確か40万人を超えてお客様にお見えいただきました。あの規模ででございます。ですから、私ども、これはやってできない、100万人云々はともかくとして、そういったお客様に来ていただくことはできるだろうと思います。

ただ、先ほど知事も申し上げましたように、美術館はいろいろな機能を果たさなければいけないわけです。教育的な機能も、ただ、ずっとお客様に来ていただくことだけを狙っていてもいけない施設ではないかなと思っていますので、その辺を、全体をやっばり総合的に考えながらいい美術館にしていくという、そういう工夫が私どもに求められているんじゃないかなというふうに思っているところでございます。

【男性J】

いいですか、ちょっと。では最後に、今、とつてもすばらしいご意見だと思って伺いました。

冒頭、ここに書いてあります4つのコンセプト、これは本当にすばらしいと思うので、できるだけこれを極めつけのコンセプトに仕上げていただけるような美術館に仕上げたいと、そんなふうに思います。よろしくお願いします。

【進行役 石川利江氏】

ありがとうございます。皆さんへのお知らせでは6時から8時という時間を設定していたかと思いますが、今、意見は出し尽くしてほしいということなので、もう少し延長になるかと思いますが、ご意見をいただきたいと思います。どうぞ、ではそちらで。

【男性K】

時間が来てしまいそうだったので慌てて手を挙げたんですが。

幾つかお願いしたり、申し上げたいことがあるんですが、端的に申し上げますと、ばかみたいに大きなテーマかもしれませんが、21世紀に輝く美術館、それから21世紀の歴史に残る美術館とは一体どういうもの、どういう美術館だろうかということを徹底的に考えていただいて、そういう美術館がどういうものであるかということをはっきりさせて建設を進めていっていただきたいということですね。

それから、長野県は、今、次世代育成事業というものに非常に力を入れていただいているわけですが、その次世代育成事業を信州美術会としても非常に重要に受けとめまして、長野県展のときに、それから各7支部において次世代育成事業に本格的に取り組んでおります。取り組み始めております。

新しくできる県立美術館は、その次世代育成事業を全県下に展開していく拠点としてのそういう美術館にしていきたい。それで、簡単に言えば、子どもたちのアトリエ

で、幼児、子どもたち、青少年のための美術館、そういうアトリエをつくっていただいて、そこでの活動が、県下の全ての美術館をネットワーク化して、全県下でそれが進められていくことを希望しております。

美術館連絡協議会というのが日本にございますね、竹内先生。それと同じような感じで、長野県美術館連絡協議会、そういうものを立ち上げて、県立美術館が主導していただけたらと思います。

それから最後にですが、長野県は教育県長野ということがかつて言われていたんですが、僕は教育県長野の復活、そして再生、そして新たな創造ということを考えて、それが長野県は文化芸術面から始まっていく、そういうことを考えています。それが美術館の建設とかかわっていきけるんじゃないかなと、そういうふうに思います。

いろいろありますが、あまり長くなるといけませんので、以上です。

【進行役 石川利江氏】

ご意見をお聞きしておきたいと思います。では先にちょっと手を挙げられていますので、役割、機能という部分でお願いいたします。

【男性L】

長野で美術関係の仕事をしております。

行政のやることというのは、私、いつも失望しているんです、残念ながら。例えば長野のつい最近できた芸術館も、本当に何だろうと思うような芸術館ができてしまったわけです。それで、最後のとりでとして、長野の本当にお宝的な位置関係にある城山公園、あそこはやっぱりじっくりとご検討していただきたいと思ひまして、それで最後、いつでしたか、1カ月ぐらい前ですか、整備検討委員会の最終の傍聴をしたんです。そして翌日の新聞に「善光寺は東庭園を回廊として結びつけるのは断念」と、こう書いてあるわけですね。何回、善光寺とお話し合いをしていただいたのか、そしてその結果になったのか。あそこの東庭園がなければ、本当に、今いっぱい建物のようになってしまって、庭園とかランドスケープとか、全くこれ無意味なことなんです。周りにそれは山はたくさんあります。ですけれども、やっぱり美術館の周辺のその庭園というのはとっても大事なことなんです。そこでいろいろ集う、それから美術館に関連したようなイベントを行う。そういう庭園らしいものが何もあそこでは生まれてこないんですよ。

それで、善光寺さんは東庭園の石垣か何かを継続させていくような形にはできないという結論が出たということが、それは何回善光寺さんとお話してそういう断定になったのか、私は非常に残念だし、残念に終わらせなくて、これから善光寺さんとそういう話をどんどんして、善光寺さん、それから城山の美術館、それから城山の全体の、さっきの地区の方とお話し合って、それでランドスケープ・ミュージアムにふさわしい、それこそ目指している世界的なミュージアムにしていきたい、いかなければもうそだと思うん

です。

それで、これって何年以内にやるとかそういうことじゃなくて、もっとうんと長い目で見て、本当にできてしまうと建物もおしまいです。もう、あんな今、竹内先生がおっしゃっているような角地の四角いあんなものをつくってしまうと、本当に何の風景も遮断してしまうわけです。だから、そういうものができる前にもっとできることは、本当に検討してから適切な位置に適切な大きさを美術館をつくってほしい、それでないという意味がないと思うんです。

それから、やっぱり50年で美術館がだめになってしまう、それは考えられないです。もっと200年、300年持つような、そういう考えでつくってほしい。建物というのはそういうものだと思うんですよ。ぜひよろしくお願いします。

【進行役 石川利江氏】

ありがとうございました。新聞記事に関してのことで、善光寺側として少しニュアンスの違いとかもあるとも伺っておりますが、ご説明があればお願いいたします。

【善光寺宮繕副部長 清水雄介氏】

失礼します。善光寺の宮繕部、主に境内の整備を担当している部署の清水と申します。

私どもも新聞記事を読んだときに少しちょっと違和感を感じまして、当然ながら、相談は何度もお受けして、あの生垣というか土塁の歴史なんか私たちも知らないものを調べたりいたしました。わかったことは、現在の本堂が1707年に再建されたときの土が出るわけですね。それがあそこに積まれたという歴史をちょっと聞いたことと、あそこに御幸坂という坂がちょうど寛慶寺から上に上がってきていますけれども、昔はあそこのところは御幸橋という橋があって、氾濫するような川があってあの土塁ができたんじゃないかと。

我々も、ですからそういう認識ぐらいだったんですけれども、当然ながら、もともと境内だったところが東庭園という形で公園という形になった歴史がありますので、公園になる前に設置された江戸時代の石碑や何かがあるということで、この土塁に関しての相談の中で、どこまで皆さんの要望にこたえられるかというところで、善光寺内部の理解を求めて現在に来ていますので。

あの記事を読んだ方は全くあれを、言い方は悪いですがけれども、削ってくれないのかというふうにとられたと思うんですけれども、あれはあの中の認識としては、もう少し、境内にいると信濃美術館はどこですかと聞かれるのは、やはり見えないからなんです。つまり見えるという点に関してどこまで協力できるかというところは最大限の今、回答をしている状況ですので、あの新聞を読んでおそらく受けた印象というのは、全くあそこから遮断された状態のままつくられていくのかということにおいては、そうではな

いということここでは言うことができます。

ただ当然、あそこに咲く花から全て先人の奉納でありますから、そこには供養を目的として植えられた木もありますし、お花もあるわけです。それをむげにワーツと移動したり削ることができない関係もありまして、入り口を広げる、出入り口を広げる、そういうことにおいては前向きに回答しておりますので、これからまたそこは具体的にしていくのではないかと思いますので、ここまでの回答になりますけれどもよろしいでしょうか。

【男性L】

ありがとうございました。やっぱり善光寺さんあつてのあの辺のパークなんですよ。ですから、それは相互に善光寺さんも協力していただくところは協力して、それですばらしい環境をあそこにぜひ実現させてほしいと思っています。ありがとうございました。

【進行役 石川利江氏】

ありがとうございます。まだまだ調整可能だということだと思います。それでは。

【男性M】

駒ヶ根市から来ました。先ほどもお話がありましたが、次世代育成のことにかかわった展覧会をぜひやってほしい。

以前より県展において高校生の作品を出展していただくことをお願いしてきました。それで、中には受賞されたりという生徒も毎年出ています。今年も20人ほど出展してくださいました。学校によっては10人出して10人入選という、そういう高校もありました。

それで、ですが、優秀な子は美大に行ったりしまして、それで残念なことに、中央のほうが刺激がありますので、なかなか地元に戻ってきて活動をしてくれることが少なくなってしまう。それで、今度の新しい美術館の企画として、10代、20代の若者を対象にした全国公募展をぜひできれば毎年開催して、その若者の制作意欲を刺激するような展覧会を行うことにより、今、問題になっています、少子高齢化とか県外に若者が流出していくようなことに歯どめをかけるためにも、若者が地元にとどまって制作活動が可能と思わせるような公募展をぜひお願いしたい。

将来、長野県ばかりでなく、日本や世界羽ばたく登竜門となるような美術展になれば、今、おっしゃっていた100万人という、そういう目標に達するか、それこそ県内外から多くの鑑賞者が長野を訪れるのではないかと考えています。ぜひそんな展覧会を実現させていただきたいと思います。

【進行役 石川利江氏】

ありがとうございました。それではその前の方、先ほど手を挙げられた。

【男性N】

上田から来ました。このコンセプトとかにもあったんですが、芸術家、地元の芸術家の紹介というようなこともありまして、それから先ほど知事の話の中で上質な美術というようなこと、ただ、美術家というか洋画家でも彫刻家でも、自称でそういうふうな者ですといえば、芸術家というのはもう芸術家になってしまうわけで、何というんですか質というのか、そういう点の長野県というのか、美術のその評価の難しさ、そういうものに対して長野県がどのように考えるかということ。

物故者とか、あるいはそういった美術のほうのある、何というんですか、メディアに乗ったりするということであれば、それは一つの評価を受けているということになるとは思うんですけども、この評価を受けていないというか、これから評価を受けるというのか、あるいは現在評価を受けているというそういう作家を発掘するというのか、見つけ出すような、そういうシステムみたいなものというもの、今現在、長野県のほうでも、芸術家ということでおっしゃられているので、そういうものをうまく見つけ出していく、あるいは埋もれている作家、そういうものを見つけ出すようなうまくシステム自体があるのかどうか、それからどのようにして、今、県はそのような作家を把握しているのか。この辺が、地元の作家を育てるなり何なりが一番難しいところなのかなと。自分も表現活動していますけれども、評価ということに対しては非常に敏感ですし、自分でも悩むところです。

この辺も県としてぜひ、ただ美術というものは非常にわかりにくいものでもあって、スポーツのように勝った負けたという世界でもないの、しかも人間の心の部分とかもすごくかかわってくる、心を評価するような部分もあるかと思うんです、美術というのは実は。

ですので、物故者に関してはある程度あるんですが、現存のとか、あるいは今後のというようなところでちょっとお話をお聞かせいただければと思います。

【検討委員会委員長 竹内順一氏】

それではごく簡単に申し上げますが。4つのコンセプトの中の一番最後、世界水準の作品の展示ということとあわせてこれ重要なところで、信州ゆかりの芸術家の育成、あるいは郷土作家の紹介ということで、そこと国際交流をしようじゃないかということと、それから将来性ある作家を目指して、将来性ある作家の作品収集。

私は、今、評価のことは今ご意見を伺いましたけれども、若手を励ますのが一番いいのは美術館で購入することなんです。お金を出してね。それ高いやつがあるかもしれないが、美術館の、公の美術館にコレクションされるとどんなに励みになるかというこ

とですので、今度は新しい運営の問題になりますけれども、収集委員会、どういうふうな形を開くか、難しいところなんですけれども、若手を中心に、ここで購入すると。

では、長野県に何年住めば若手になるのかとか、いろいろあると思いますが、今、いろいろなほかの県で見ていると、その大学を卒業すればもうゆかりになるとか、いろいろな、例えば信州大学に在籍すれば、それでもゆかりにするとか。いろいろな非常に範囲が、柔軟にできているんですね。そういうものに基づいて、早くこの購入費の予算をとってどんどん買っていくと、それで買っていくシステムが見えるよということですね。それから今、おそらく平面の絵画を頭に入れておりますが、先ほどありましたように、立体のものも多いし、それから工芸品もいい作家がいっぱいいるんですね。

ですから、工芸にも彫刻にも立体にも、そして平面にもやさしい、あるいは最近のことですから、もう現代美術もパソコンでやったり、随分変わってきていますから、そういうものに対する心の広さというんですか、そのところもやっていかないと意味ないので、これは新しいスタッフの学芸員たちがどういうふうに向き合うかということになると思いますが、ご要望としては大事ですので、ぜひ実現したいし、ここにある程度、そのことを書いているつもりですということで、お答えしたいと思います。

【進行役 石川利江氏】

ありがとうございます。今の信濃美術館も若い芸術家を支援するネクストなどという支援の体制も持っているかと思います。

【男性B】

私は今年、九州のハウステンボスで展覧会をさせていただきました。そのときに美術館のほうで言われた言葉の一つに、オンリーワンをできるだけ選んでいますということをはっきり言いました。私、これは大事なことではないかなというふうに思っております。これも大きな選択肢ではないでしょうか。

【進行役 石川利江氏】

ありがとうございます。それではどうぞ。

【男性O】

地域に住んでいる者ですが、コンセプトの1番の、私、このランドスケープ・ミュージアムというのは非常に心を揺すぶられました。とてもすばらしいことだと思う。

やっぱり風景というのは、行ってみたい、さらには住んでみたい。だからあそこの美術館のところへ来たら、長野っていいな、ここに住みたいなという。やっぱり風景画を外から見てきれいだなで一回で終わってしまうけれども、やっぱりそこへ来たら、善光寺さんから見た、自分たちが住んでいても、春夏秋冬、朝夕、ものすごく美しいとこ

ろです。大勢の老人がいたり、昼間、お母さんたちが子どもを連れてきたりして非常にすばらしいランドスケープだと思いますので。

そのところで一つだけ気になるのは、やっぱり住んでみたいといのは、今まで住んでいる人たちが住みやすいなということを実感することが大切ですので、さっき言ったように、地域とのそれをやるということを非常に押してほしいということが一つ。

特に私が住んでいる第2地区の場合なんか、2,000人いる地域住民の中の70歳以上は540人ほどいます。そういう人たちを考えたれば、やっぱり老人にとってもここに住んでよかったなと、やっぱり老人力というのは大切なものです。そういう意味で、先ほど交通体系のこと、それからほかの、ここの会場をやるときに駐車場を広げてほしいとか、駐車場の問題もありましたけれども、本当にどこの場所も駐車場があれば、そこに住んでいる住民にとっても、また外から来た人も、あそこは交通が便利でよかった、また行きたいと。昨年度の御開帳の交通体系は、善光寺さんの本堂の周辺でも非常に素晴らしかったです。ものすごくよくて、それで中心の参道のところでも、何十年ぶりにこんなに参道を上がって善光寺さんに来る人を見たことはない、住んでいる人はみんな言っています。

ですから、ぜひそういう大きな、美術館と善光寺というだけでなく、もっと広い面の中で交通体系を考えていただいて、県境の人がいっぱい来ていますから、それでいろいろありますから、そういうところを考えて、安直に駐車場を考えないでほしいということ。

特に私、今がっかりしているのは、東山魁夷館の横の駐車場、あれが地域住民にとってイベントがあるたびに大渋滞になっているんです。だから住んでみたいという、このランドスケープ・ミュージアムを壊していると思うので、やっぱり地域の人が応援しない限り、地元の人が応援しない限り、来た人にきちんと案内してやるというのはやっぱり地元の人だと思えます。ぜひそういう意味で、長野市の、また長野県の人口増加につながるようなランドスケープ・ミュージアムのほうを工夫していただきたいと思えます。期待しています。

【進行役 石川利江氏】

ありがとうございます。それでは、ランドスケープ・ミュージアムというコンセプトとも関係してきますが、地域とともに歩むような美術館、善光寺との回遊性を高めた新美術館へのご意見、期待などもいただきたいと思えます。

またここで観光と美術館との関連とか、その辺のご意見をお願いいたします。

【男性D】

ペーパーを用意してきたんですけども、もしあれであれば配らせていただければと思うんですけども、よろしいでしょうか。

【進行役 石川利江氏】

ではペーパーをお配りいただきたいと思います。

【男性D】

すみません、今、ここで配りますので、すみません。

最初に説明させていただきましたが、私も去年の4月に改築委員会をやって、立ち上がった前からちょっと城山公園のランドデザインということでいろいろ考えてきておりまして、今、下に書いてある8名のメンバーでいろいろ検討しております。

具体的にはちょうど後ろのページに、ちょうど紙の裏なんですけど、いろいろ具体的なことを細かく書いておりますが、時間が多分ないと思いますので、項目だけちょっと読ませていただきます。

まず1としては、城山公園のランドデザインの策定委員会の設置ということなんですけれども、これ当然、長野県、長野市、善光寺当局と専門家、及び地元住民による委員会の設置ということが必要だと思います。それから県民参加による新美術館と城山公園のランドデザインシンポジウム、要するに県民がこのランドデザイン、あるいはランドスケープ・ミュージアムということを理解していくためのシンポジウムとかワークショップ、こういうのをこれから定期的で開催していただければいいなと思っております。

それから3、新美術館のコレクションポリシーの決定、これは非常に重要な部分だと思います。でも、これは改築委員会、あるいは美術館協議会さんのほうでの内容の決定にはなっていくのではないかというふうに思っております。

4、善光寺、新美術館、城山公園が一体となったランドデザイン、そのコンセプトの決定と、先ほども出ておりましたけど大規模駐車場の設置、同時に考えていかなければいけないことではないかと思っております。

それから5、城山公園の新設規模と長野市の文化施設、轟部長からもちょっとお話し出ましたけれども、蔵春閣とか第2庁舎、城山庁舎ですね。その活用ということで、例えば「産業デザイン館」とか「おもてなし館」などの点も全面的なご協力がもらえないかと思っております。

(1)として、新美術館の玄関との位置づけで全県の産業発展に貢献する産業デザイン館の創設ということと、信州産の食を味わうもてなし館、長野迎賓館と仮につけていきますけれども、その開館。例えば、ここではジビエ料理などが味わえるというようなものも一つ、方法ではないかと思っております。

それから6としては、これも事業計画に対しての国の助成とか、そういうものをちょっとここへ並べてあるんですけれども、「ゼロエネルギービル」というものを検討いただければと思います。

それから国の施策との連動ということで、この6月に閣議決定されている内容で、こ

ういったものがいろいろ助成できるようですので、こういったものをご検討いただければうれしいなと思っております。

【進行役 石川利江氏】

ありがとうございます。

【検討委員会委員長 竹内順一氏】

ここまで用意していただきまして、大変ありがとうございます。

当然、これは美術館の側との関係も多いです。ここにランドスケープ・ミュージアムのためのシンポジウムを開いてということも非常に参考になりまして、小さなことから大きなことまで随分書かれていますので、ぜひ受けとめてやっていきたいと思えます。本当にどうもありがとうございました。

【県民文化部長 青木 弘】

すみません、貴重なご提言をいただきありがとうございます。

その中で幾つか、個別に全部お答えするということではまだいきませんけれども、ランドデザインの関係につきましては、先ほども長野市さんのほうからもございましたように、ああいう形で長野市さんも整備検討の関係の委員会を立ち上げていかれるというふうにお話を承っておりますが、考えているところはやはりランドデザインというものをどういうふうに描くかということだと思います。私どものほうも、県のほうもそのときには一緒に参画をさせていただければというふうに思っております。

また、シンポジウムの開催ということでございますけれども、知事からも以前申し上げておりますけれども、基本構想をこれから策定してまいります。私どもその基本構想を策定して終わりではないと思っています。といいますか、逆に言えば基本構想がある意味でスタートラインに立つというイメージを私ども持っておりますので、さらに基本構想というものは本当にまさに基本の部分でございますので、それを具現化するためにどうしたらいいかということにつきましては関係の皆さん方と、こうやって意見交換のような場も、これからも必要になってくるのではないかとこのように思っております。

例えばその中で、「デザイン館」とか個々具体的な話もございますが、これについてはちょっと、そういったご意見があるということで受けとめをさせていただきます。今日はその辺ですが。

あと、さまざまな国の制度というお話もございました。これは大事な視点でございます。私どももいろいろな面での、例えば財源的な部分でも、いろいろな有効なものは取り入れさせていただきたいというふうに思っておりますし、今後とも国の動きも十分に把握しながら、国の方向性と一体でできるものについては工夫していきたいというふうに思っているところでございます。

すぐできることとできないこともございますけれども、貴重な提言をいただきまして、

まことにありがたく思っております。

【進行役 石川利江氏】

ありがとうございます。今日は善光寺界隈のまちづくりに関係している方たちもいらっしやいますが、何かご意見あればお願いいたします。では、そちらの方、お願いいたします。

【男性P】

いいですか、回答いただかなくても結構です。

先ほど、長野県知事 阿部守一及び委員長のほうから、100万人を呼びたいというふうな申し出がありましたけれども、これは美術館がきわめて魅力的で、どんどん人が来るというだけでは100万人の人にサービスできないんですね。周辺の環境というのが大事になってきます。公共交通網体系はどうなるのか、駐車場はどうなるのかという具体的なものが出てくるので、幅広い視点が必要になってくるので、その辺のところも、ただ100万人といってもそこにはいろいろな付随されてくるものがあるということ、ちょっと認識をいただきたいと思います。

【進行役 石川利江氏】

ありがとうございます。一番後ろの方、どうぞ。

【男性Q】

すみません、さっきの一個前の質問の、一個前の質問に関連してなんですけれども、県民シンポジウムを開いてくれという要望の中に、さっき長野市さんのほうで城山一体の整備の検討委員会を立ち上げるとか言っているんですけれども、住民の方は入ることなんですけれども、ぜひその中に県民も入れてほしいなと思います。

やっぱりあそこは観光地でありますので、住民の方の意見も大事ですが、やっぱりそういう観光客という、そういう視点での面も必要だと思うので、ぜひ県民の方も入れていただきたいなと思います。

【進行役 石川利江氏】

ありがとうございます。

【長野市都市整備部長 轟邦明氏】

検討させていただきます。

【進行役 石川利江氏】

ほかにありますか。ではお願いいたします。

【男性R】

地元の者です。

先ほど、私ども第二地区の役員からいろいろご意見いただいておりますが、その関連で、私ども第二地区として善光寺界限の、いわゆる善光寺と善光寺下駅と道路整備を県のほうに陳情しております。そういう中で、提案書という形で県のほうに申し上げてございますが、その辺のところで、今の信濃美術館と一体として整備していただきたいと。そのこの黒板といいますか、そこに城山公園一体の整備の検討というふうに書かれておりますが、その中に、善光寺下から仁王門までの東参道をとということで提案もしてございます。そこを一体化という意味合いの中でぜひ整備をお願いしたいと。それで私どもお願いしているのは、次回の御開帳が、あと5年後にあるわけですが、それまでにはその道路整備をしていただきたいというお願いをしております。

そういう中で、今年度に地域の測量という形で予算づけされましたので、何か一歩、進んだかなという思いは持っております。そういう中で、ぜひ知事さん、ここにおられますので、知事さんを初め関係の部署にご協力のほどをお願い申し上げておきたいというふうに思います。よろしくお願いいたします。

【進行役 石川利江氏】

ありがとうございます。

【県民文化部長 青木 弘】

ありがとうございました。また担当部局、建設部になるかと思えます。私の立場でもそういうお話があったことをお伝えをさせていただきたいと思っておりますけれども。

【長野県知事 阿部守一】

私のところにもちゃんと、そういうご要望があるというお話は伺っています。

それで、この信濃美術館のコンセプトの中にも、やっぱり周辺の町並みとの一体感ということも意識しなければいけないというところもありますので、先ほどから地域の皆さんのご意見、いろいろ出ていますし、また長野市でも城山公園、これからどうしていくかという検討の場を立ち上げて、そこにも我々県も参画して長野市と一緒に考えていこうと思っております。

そういう中で、今のお話もご要望は受けとめて、これは予算の話になると、私も今の段階でいついつまでにやるというふうにはなかなか申し上げられないですが、しっかり受けとめて対応を考えていきたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

【進行役 石川利江氏】

それでは、あとおひとりに限らせていただきたいと思いますけれど、たくさん手が挙がっていますが。ではそちらの方で、お願いいたします。

【男性S】

基本的な質問も含めてですが、善光寺とこの美術館と一体化して考えることは必要なのかどうか。信濃美術館へ行っている方が、善光寺から流れてきている方というのはほとんどいないと思うんですよ。

昨年ですか、一昨年、御開帳のときも、あの期間で3万どのくらいといたら、ほとんどふだんと変わらない。非常に、あのとき仏像のとて面白い企画をやっていたので、そういうことを行ったんだと思うんですが、それならば、もっと美術館としての客が来る、そういうやっぱり美術館にしてもらいたいと。

そうなった場合、善光寺の隣ではなくて県民文化会館、それから県の図書館がある、あそこに持って行って文化芸術の集積というようなことで、そのほうがよほどふさわしいんじゃないかというふうに私は思うんですけれど。

東口も整備がもう大分進んできて、駅からあつという間に行けるわけです。そうした場合、やっぱり県からいろいろ来ると、長野駅からすぐだということで交通インフラも考えることがないですし、非常にあちらのほうがよっぽど、立地だとか、いい美術館ができると思うんですけれどもいかがなんでしょうか。

【進行役 石川利江氏】

ありがとうございます。それでは、ほかにも手を挙げていた方、全部お聞きしたいと思います。あとでまとめてお答えをいただくようにいたします。その後ろの方、ではお願いいたします。

【男性T】

東御市から来ました。ふだんは絵画作品の保存ということで、美術館の古い額縁を直したりとか、そういうような仕事をしております。

実は今日来ることになったのは、数日前に新聞にこのミーティングの記事が載ってまして、その記事の中で、県展のためのスペースをとってほしいという言葉が出ていました。その記事を読んだときに、僕としましてはいたたまれなくなりまして、今日駆けつけたようなところです。

その趣旨というのは、まず美術館というものが、その貸し館をするというのは本来おかしいと思うんですね。美術館というのは本来、表から言うならば、学芸員といわれる方々が料理人ですね。料理人で入館者の方に料理を提供するというのが本来の姿だと思

うんです。それを放棄して人が料理したものをそこに並べるとするのは本来おかしいと思うんです。

我々のほうから言いますと、幾つか県立クラスの美術館の仕事をしながら拝見していますけれども、例えば県展なんかを開催されますと、ふだん美術館が必死に守っている裏方の環境に一般の方がどかどかと入ってくるんです。これは、今テーマの中に、4つのテーマの中に、その作品の保存の重要性ということがありましたけれども、その年間何回か行われる一般の方々が出入りする展覧会のために、ふだん美術館の学芸員の方や皆さんが大変なお金と時間をかけて守っている環境がなかなか維持できないという現実があるんですね。ですから、貸し館という発想はやっぱり美術館にはそぐわないと思うんです。

この中でありました教育普及の一貫としての県民ギャラリーということなんですけれども、こういう形でもしギャラリーというものがどうしても必要だとするならば、一緒にありましたワークショップとか、それからアトリエですね。それらを含めて、先ほど竹内さんがおっしゃったように、そのフレキシブルな空間として全く美術館とは別棟に、美術館のそば、もちろん一つのエリアの中でいいんですが、しっかりとしたその貸し館専用、貸し館というか、こういう教育普及専用のワークショップのスペースを確保するという形が運営上も理想的ではないかと思うんです。そうすれば、運営が基本だと思いますので、先ほどおっしゃったような、展覧会をやりたいたときにそこが埋まっているということはなくなると思うんです。ただ、ここで問題になるのが、ではその附属施設にした場合に、スペースがその県展にふさわしいスペースがとれるのかということになるんですが。

先ほど来、いろいろ意見が出ていますけれども、今回できる信濃美術館で県展をやらなければいけないという理由はないと思うんです。もしくは、県展が1カ所にまとめなければいけないという理由もないと思うんです。ですから、この方法を使った県民ギャラリーなり、ワークショップセンターでもいいですけれども、その空間はいろいろ検討した結果のふさわしいボリュームでつくっておいて、もし、県展の長野支部展をやるならそれでもかまわないと思うんですが、去年の実績を見ますと、県展は松本市美術館ですか、でやっていらっしゃるんですけれども、それを地方それぞれの地域の公民館とか、そういうところを使って展覧会をやればいいんじゃないかと思うんです。

もし、もしそれでももうひと息ということであれば、学芸員の目で見ると県展を見て、そういう中からピックアップしたものを、学芸員がちゃんと料理をした形で長野県の展覧会として美術館でやるとか、そういう形をとって、何でもかんでもその団体の方々が望む展覧会を美術館でやるという発想はもうやめたほうがいいと思うんですね。

それ自体はいけないとは、皆さんが活動されること自体、全然いけないとは思っていないんですが、その展覧会を美術館という器の中でやることに私は反対です。

【進行役 石川利江氏】

ありがとうございました。ほかにご意見ある方は、ではお願いいたします。

【男性E】

信濃美術館、開館と同時にずっと50年間、おそらく美術館関係者以外の方以外では、一番長くお付き合いをさせていただいている立場だと思います。

近藤先生の前文化庁長官、河合隼雄さんがミュージアムパワーという言葉をよく使ってらして、行ったら必ずそこでその作品が見られる。これはその美術館の最大の魅力であると。

外国であいさつをして名刺交換をして、その後、ところであなたの住んでいる町にはどういう美術館があるかという話になる。ところが、残念ながら日本のビジネスマンの方々がその話題になると、そこから先、話が通じなくなってしまう、それほど小中高における、地元での美術館、博物館の教育がほとんどなされていない。

逆に、我々としても展示会をかなり大きな規模で検討、やりたいわけですから、先ほど県展といたしましたけれども、県展の中には書道展があり、美術展あり、写真もありますので、それを一括して県展という呼び方をしているかどうかわからないんですけども、少なくとも書道県展の場合、展示スペースが狭いのでかなり厳しい入選率になっています。もう少し展示スペースが広ければなという思いもします。

第1回目の会議のときにも申し上げたんですが、常設展示館と貸し館の建物を2棟にできませんか。そうすれば、常設展示館で常に信濃美術館の持っている美術品を展示できる。

とにかく今の信濃美術館の収蔵スペースはひどいものです。館長さんがかわり学芸員がかわっても、美術品そのもの変わっていないわけですから、そうすると、今の信濃美術館の収蔵スペースは目も当てられないほど悲惨な状態です。どんどんどんどん作品が劣化していくのは目に見えています。ですから、一刻も早い信濃美術館の改築をお願いしたい。と同時に、2つの目的を持った2つの建物をできれば建設していただきたい。

それから100万人という数字がさっきから話題になりましたけれども、100万人は簡単にできます。おとついで、阿部知事も県の日中友好協会60周年の会議に出ていらして、中国大使館の方が、これから年間、中国人の訪問数が1,000万人に近くなりますと。ということは、インバウンドで1,000万人のうち10人に1人長野県に来てくれたら、インバウンドだけで100万が達成できます。

ただし、ここに条件があります。私も年に二回ぐらい中国に行っているんですけども、その中国人の美術関係者と話をして、長野県、美術館・博物館の数が圧倒的に多いんだから、もっと美術館、博物館に来てよという間違いなく、教育県長野といいながら、県立の書道美術館がないじゃないかと。中国人の考える美術館・博物館というのは、まず書道の作品を見に行く施設だと。文学も教育も哲学も思想も全てもとは書道だろう

と、言われて見れば確かにそうです。書道のない、そういう活動は考えられないわけですから。そうしたときに、その教育県長野というんだったら、県立の書道美術館でもつくれよと、そういうことで、驥山館を県に寄附して書道美術館にしたらどうかということまで言ってくれる中国人が何人もいます。

そんなことも含めて、インバウンドも、お客さんを考えた観光行政と、それから書道美術館、それから常設展時館、それから貸し館というようなこともお考えいただけませんかでしょうか。

【進行役 石川利江氏】

はい。ありがとうございます。それでは、お願いいたします。

【男性U】

すみません、長野市に住んでいる者です。整備検討委員会の議事を県のホームページより毎回見ていました。

それで、その中で、第5回目の検討委員会の中の基本構想の中に、新県立美術館の広さが11,000平方メートルだったのが、第6回目になったときに1,000平方メートルほど減っていたんですけども、その減った、その理由というのをちょっとお聞かせ願いたいなど。その1,000平方メートルが減った中で、特に企画じゃなくて常設展示のほうが1,000から500に半分に減ってしまった。その辺の理由もちょっとあわせて教えていただきたいなど。

個人的には、収蔵数が県立美術館のほうは4,000点近くあって、それで500平方メートルというのはちょっと少ないんじゃないかと。500平方メートルというと今、東山魁夷館と同じぐらいになりますので、それが企画展示、常設展示として500平方メートルだとちょっと少ないんじゃないかなということ、その辺も、要望とあわせてちょっと質問させてください。

【進行役 石川利江氏】

幾つかのご質問、ご意見が出ましたけれど、ご意見としてお聞きしておくものもございすし、お答えいただいたほうがいいものもあるかと思いますが。

【県民文化部長 青木 弘】

それでは順次、幾つかご質問をいただいたり、ご意見もいただいたところでございす。大変ありがとうございます。

一番最後の方のご質問でございす。16ページをごらんいただきますと、常設展示室については今1,000平方メートル、それから企画展示室1,500平方メートル、当初の3月時点での報告からの変化の理由ということだったと思います。

一番最初の3月の時点では、この東山魁夷館ということについてのあまり記述をさせていただけていない、そういう内容であったかというふうに承知をさせていただきます。そういう中で、やはり東山魁夷館の今後のあり様を考える中で、一部、東山魁夷館のほうの機能の向上もさせていただくといえますが、改修の中で、そちらのほうに少しシフトした部分もございまして、完全に1,000平方メートルをなくしたという、そういうことではなくて、差し引きの勘定の中で必要なものを盛り込ませていただいたというふうにご理解をいただければというふうに思っております。

それから場所の話もご指摘をいただいたんだらうと思います。この点、長年、50年間にわたりましてこの城山の地籍の中で私どもの信濃美術館というものが存在し、地域の皆さん方の応援をいただく中で今まで、これまで一生懸命運営もさせていただいたと、そういう長年のいわゆる歴史、そういう定着してきた地域にやっぱり定着してきたものではないかなというふうに思っております。

先ほど来からも、地区の皆さん方からも温かいお言葉をいただいているところでございまして、私どもとすれば、城山公園の中であくまでも改築という形で考えさせていただいたという、そういう整備報告、委員会の報告ではないかなというふうに思っています。それで東山魁夷館との接続も果たす中で、お互いに機能を連携させるという、そういう効率的な部分も視野に入れていただいた提案をいただいたのではないかなというふうに思っているところでございます。

県展の関係は、本当は委員長さんからお答えをいただくのがよろしいのかなというふうにも思っておりますけれども、美術館のあり方、これは貸し館というのはおかしいという、今、お話もございましたけれども、私の知る限りでは、東京の新国立の美術館はまさに貸し館だけのそういう美術館として運営をされているというふうにも承知してございます。

先ほど来、県展にかかわる皆さん方からも、その必要性もかなり強くご主張もいただけてきた経過もあるというところでございまして、ただ問題は、ご指摘いただきましたように、県展の皆さん方のスペースと、それから本来のといえますが、先ほどおっしゃっていただいた美術館の果たすべき役割というのが、それがあまり混在したり、そういうことはやっぱり好ましくないんだらうというふうには思っております。

動線の問題、それから搬入口の問題、やはりそういう部分はしっかり分ける中で、また美術館、いわゆる美術館としての機能と、それから県民ギャラリー等々の、そういう県民の皆さん方が貸し館として期待する機能というものをうまく整合性をとっていくということが、私どもに課せられた役割ではないかというふうにも思っております。

あと美術館の2棟という話もございましたけれども、今の話とも連携する話だと思うんですけれども、今後、その部分をどういうふうにも今後、正式に決めさせていただいて具体的な設計の段階になった場合には、どういう形での建物というものをご提案いただくかという、そういう中でやはり皆さん方の疑問とか課題というものをできるだけその

建物の設計の中で生かしていくかということが、とても必要だというふうに考えておりました。基本的には。

そういった中で、今後、基本構想が定められた後の話になるわけですが、その際にもこうした機会というものとはできるだけ持たせていただく中で、皆さん方と意見交換する中でよりいいものにしていくという、そういうプロセスがこれからも必要になってくるんじゃないかというふうに思っているところでございます。

十分なお答えになるかどうかわかりませんが、もし補足していただくところが委員長さんのほうでございましたら、お願いしたいと思っております。

【検討委員会委員長 竹内順一氏】

積算の技術の問題があるので、よくホームページを見ていただきまして、そこまで気がついて、僕は感動、気がついていただいて感動しております。

議論はありまして、積算の仕方の基礎数が多少ずれましたので、企画展示室を減らそうとか、常設展示を減らそうじゃなくて、総合的にもう一回見直そうということで数字が、多分1,000ぐらいですか、変わったと思いますけれども、ということによろしく。

その一番大きいのは東山魁夷館の機能を見直そうということなんです。ですから、将来は、今、簡単にいかないんですけども、東山魁夷館のほうで常設展示機能もあわせていこうということで、東山魁夷しか扱わないというのもどうかということになったわけです。

【進行役 石川利江氏】

ではこれで今日の皆さんの意見交換を一旦閉じさせていただきます。

本当に皆さんの美術館に対する期待や、思いの強さを感じる時間でした。収蔵方針や運営体制など、具体的にどういう美術館になっていくのか、この後に基本構想が出てきたところで、またもう一度、皆様の熱い思いやご意見をいただくような機会もあるかと思っております。

美術館は未来に残す大切な財産であり、私たち県民の共通の文化資源として大事な美術館ですので、今日の皆様の思いを受けとめて、これから基本構想を出していただけたと思いますので、期待申し上げたいと思います。

それでは、本日の意見交換全体を通じまして、知事から総括コメントをお願いいたします。

5 知事総括コメント

【長野県知事 阿部守一】

どうも皆さん、予定の時間を大変オーバーして、長時間ご同席いただきまして大変あ

りがとうございました。

あまりコメントをこちら側からしなかったなというふうに思っているのが、男性Kさんから出た教育の話ですかね。私は実はいろいろなところで最近言っているのは、長野県、昔、教育県と言われていたと。私はまだ教育県だと思っているんですよ。でも、多くの県民の皆さん教育県だとは思わなくなっている。教育県の復活、再生ということはもちろんいいのかもしれませんが、私は学習県にしたいなということを言っていて、教育というのはもともと本当にエデュケーションなんで、ここの能力を引き出すということだと思っんですけども、何か日本の場合、教育というのは何か教え込むみたいなイメージが強くなっています。

昔の教育は、やっぱりみんなが寺子屋で大勢学んでいた、あるいは明治初期の学校の就学率が長野県は高かったということで、そこをベースにして教育県という位置が確立をしてきたわけですけども。私、これからはやっぱり、この文化芸術で冒頭申し上げたのと同じように、私は多様性というのが尊重される社会でなければいけないんだろうなというふうに思っています。それを考えても、一人一人がやっぱり主体的に学ぶ。ぜひこの文化芸術の部分も、この学習県というような発想とも連携をさせて考えていきたいというふうに思っています。ぜひ、子どもたちへの教育ということは、皆さんにもご協力いただきたいと思いますので、よろしく願いいたします。

それから、男性Hさんから障がい者アートの話があって、私はこの障がい者のアートをどう位置づけるかというのは非常に、この間もちょっとお話をさせていただいたんですが、非常に深い本質的な問題があるなというふうに思っています。

文化振興事業団の近藤理事長には、これからの文化を目指すというか、取り組んでもらいたいと方向性として先ほど申し上げた教育、学習の話と、それからやっぱりどんな人も芸術に触れ合える、障がい者の皆さんも含めて環境づくりと、それからやっぱり障がい者の皆さんも含めて、やっぱり自己実現であり、自分の表現の場でもありますので、そういうものをやっぱり県全体として伸ばしていくことができるようにしたいなというふうに思っています。また、障がいがある方のアートをどう考えるかということも、またしっかり考えていきたいと思っています。

それから全体を通じてですけども、今日、何というか、大きく分けると今の城山公園周辺の皆さんのこの地域に対する強い思いと、それから長野県全体の視点で文化芸術をどう位置づけていくんだという、大きな話題としての塊があったんじゃないかなというふうに思います。

今日は長野市からも轟部長にお越しいただいていますし、善光寺からも清水副部長にお越しいただいていますけれども、何人かの方からもちょっとご指摘いただいたように、私はこの問題は、当初から長野市と善光寺と一緒に考えていかなければいけないというふうに思っていますし、今日は長野市、普通タウンミーティングとかだと県だけで勝手にやっているんですけども、今日のテーマは長野市と善光寺からもお越しいただかな

いと完結しないだろうということで、わざわざお忙しいところをお越しいただいています。

これからもしっかり連携を取って進めていきたいというふうに思いますし、私もまた加藤市長とも直接お話をし、長野市側から見たときのこの課題、それから我々から見たときのこの信濃美術館と城山公園をどうするかということをやっぱり率直に長野市と長野県とで意見交換して、やっぱり同じ思いを持って進んでいけるようにしていきたいというふうに思っています。ぜひ、何よりも地元の方のご理解とご協力とご支援が不可欠だと思いますので、ぜひ、これからも皆さんのお考えは随時伺いさせていただきます。

それから県全体の位置づけは、この県土の広い長野県、今日は長野市で開催しているんですが、多分、南のほうに行くと、何であんな遠いところという感覚の方もいらっしゃるだろうというふうに思っています。そういう意味で、私の立場からすると、もちろん長野市に立地する施設でありますけれども、やはり県民全体から受け入れていただける。そして何よりもやっぱり県民の皆さんが愛着を持っていただく、親しんでもらえる、そういう施設にしていきたいというふうに思っています。

先ほど青木部長からもちょっと申し上げましたけれども、今月、県内何箇所かでこういう形で対応させていただいていますけれども、私はこれはスタートだと思っています。これから信濃美術館なり城山公園に具体的に手をつけていくことになるだろうと思っておりますけれども、そうした段階であったり、あるいはもっと言うと、これ美術館ができてからも県民の皆さんとはやっぱりこういう対話をしながら、ハード面の問題、ちょっと今日は整備方針ということで、どちらかというハードの話だったんで、ちょっとどちらかという結構運用とかソフトの話のご意見が多かったなと思いますけれども。そういう部分はこれから積極的に、私であったり、あるいは信濃美術館の館長さんであったり、あるいは県民文化部の職員であったりが、文化芸術関係の団体の皆さんはもとより、いろいろな皆さんと意見交換しながら、いろいろな取り組みを進めていく必要があるというふうに思っています。

何となく今の文化行政というのはちょっとそういう、県民の皆さんとの対話もやや弱いかなというふうにも率直に思っていますので、ぜひこの信濃美術館の問題であったり、あるいは、先ほど冒頭申し上げた文化芸術全般であったり、この文化芸術のところ、やっぱり主役は我々行政ではなくて活動されている、文化芸術の活動されている皆さんであったり、あるいはそうした文化芸術に親しまれようというふうに思われている県民の皆さんお一人お一人がやっぱり主役でなければいけませんので、そういう姿勢でこれからも取り組んでいきたいというふうに思います。

今日はさまざまなお意見をいただきました。あまり芸術に精通しているとは言えない、どちらかという、疎いほうの私とすれば、非常にこれから取り組む上で参考になるご意見をいっぱいいただけたというふうに思っています。

竹内委員長はもう専門家でありますので、これからも竹内委員長を初めこうした専門家の皆様のご意見も承りながら、そして私は行政の立場で、今日は非常にポジティブなご意見が多かったのですけれども、私の立場は県全体の財政とか、そうしたこともこの文化芸術の振興とあわせて考えながら、ぜひ多くの皆様にご理解いただけるものにしていきたいというふうに思っています。

どうか、今日お越しいただいた皆様方にはこれからも引き続きさまざまなご意見をいただき、そして、ぜひ私どもの取り組みにはご理解とご協力を賜りますように心からお願い申し上げます。私からの皆様方へのお礼のごあいさつといたしたいと思います。ありがとうございました。

6 閉 会

【広報県民課長 藤森茂晴】

参加の皆様、長時間にわたりどうもありがとうございました。それから石川様、本日の進行、本当にありがとうございました。会場の皆さんの拍手で感謝の意を表したいと思います。ありがとうございました。

それでは、事務局から連絡をいたします。限られた時間の中でしたので、ご発言いただけなかった方もいらっしゃるかと思います。お配りした封筒の中にアンケート用紙が入っておりますので、ご意見などを記入していただきまして、出口のところに回収ボックスがございますので、そちらのほうに入れていただければと思います。

大分暗くなって寒くなってまいりましたので、気をつけてお帰りいただきますようお願い申し上げます。以上をもちましてタウンミーティングを終了させていただきます。

どうもありがとうございました。